惡き感化を蒙るに至るや彼等は神が其選民たるべきを要求し玉ふ由を警告せられしなりかくの如くにして彼等は嚴酷なる律法によりて其隣邦諸民と其道德上の惡德とよりして分離せられ來りぬ而して此の分離的態度は遂に其終を告ぐるの時期に到達したりと雖そが教へんと企てたる眞理は新約聖書に於て更に一段の高調を見るに至りぬ曰く「肉に由りて生るゝ者は肉なり靈に由て生るゝ者は靈なり」曰く「人もし新に生れずば神の國を見る事能はじ」と則ち基督教徒は靈の供物を捧ぐる祭司に選ばれたるもの、聖き國民、特殊の民として召を蒙りたるものなり而して教會は再生者の團体にして人は凡ての惡より救出されざる可からず彼に救の道あり、人は神との交通を要す神と共なる生活は人の嗣業なりてふ事實に對する純正着實、不變の證者なりと宣言す、果して然らば基督教は波羅門教が其特質として目指せる目的を成就するものなり而かも其之れを爲す何人をも亦如何なる階級をも動物として擯斥嘲罵する事なきなり、顧ふに福音は何人をも失望せしむるものに非ずイエスの召は普遍にして人を聖きに導くものなり教會は彼の心をもて心とせざる可からず此心ありて始めて教會は彼の身体たるを得べし若し人間的に之れを謂へば地球上に於ける神の教の成敗は一に掛りて基督教徒が基督の如き性格を有するや否や教會が其國々に於て各自の歴史と國民的生活とに適合するの教會なりや否やに存す而してこは印度に於て特に然りとなす蓋し地球上に於て印度人程宗教的なる人民あるなし去れば印度に於ては基督教は基督教徒が果して其最高の理想に相當はしき性格を有するや否や彼等が果して(若教若くは新教の摸擬的教會ならざる)自國の獨立教會を建設し得るや否やによりて其良否を判定せらるべしかゝる教會にありては印度自らに其根底を有すべきものにして其信條と形式と財本とに對して決して外國の補助に待つ所ある可からず、かゝる教會にして存在せざる限りは階級制度は猶ほ久しく殘存すべきや必せり、之れ寧ろ自然の數にして舊來の社會制度に代はるべき新社會制度の起らざるに方りて俄かに舊來の制度を滅却するか、さなくもそが漸次朽壞するに至らば之れ社會にとりて由々敷危險たらずんばあらず、

(二)　神と人とに關する教

印度教は凡神教なり吾人は神と人との關係に關する思想が根本的に同一にして

終始凡神的趣味もて一貫するを見る其叙述の方式は如何なるものにもせよ其章陀たると哲學的組織たると法律書たると翠歌たると戯曲たると叙事詩たるとを問はずバラナの中にもタントラの中にも齊しく凡神的思想もて顯著なるものあるを見るなり去れば印度教に從へば萬有は皆ブラマにしてブラマ以外には決して何物も存在する事なし則ち以爲らく「萬有は藁の如き最下等のものより」神の如き最高等のものに至るまで皆ブラマなり人間の靈魂はブラマより流出し來るものなりブラマと密接の關係を得んとならば人は地球上に存在する間に望ましき事物と全く絶縁せざる可からず「吾人は全生涯を通じて決て執着する所ある可からず猶太洋上の游泳者が衣服の障礙なくして思ふ儘に游泳するが如くなるべし人の靈魂は猶恰かも其生地より引拔かれたる蠟の如く悲しき調子もてブラマとの分立を哀哭し燈せる蠟燭の如く離されたる蠟の如く悲しき調子もてブラマとの分立を哀哭し燈せる蠟燭の如く熱き涙を流しそが個体の消滅をば世の桎梏より脱し唯一の愛者に復歸するの方法として中心其時の至るを熱望す」とこは實に總ての印度人が抱有する所の思想なり然り而して此思想に重きを置かざるの宗教は印度に於て成功する事なかるべし蓋し「近世印度人の宗教印度人の性質および印度人の思想の形狀はカリダサの時代若しくは古代に屬するヴィアサおよびワルミキの時代も今日も全く同一にして毫も異なる所なし若し異なる所ありとすればそは唯晝夜の變化に過ぎざるのみ」。

此事を證せんが爲めにはメヌの法律とバカワドギタの如き全く其性質を異にする書物よりして其文句を拔粹し來るを宜とす、ブリグはメヌ神が最上者より太始に授けられたる法典を他の聖人どもに傳達すべしと任命したる人なるが彼は靈魂輪廻と未來の至福とをもて其章を結べり曰く「かくの如くにして全智なるメヌは人類に對する其慈心よりして此超絶的律法を予に現はし給へり、こは之れを受くるに當はしからざる人々に對しては熟心に秘せざる可からざるものなり、去れば各ブラマ人は有らゆる自然界――見ゆる物も見へざる物も――を神の靈の中に存在するものとして專心一意之れが考察を怠る可からず何となれば神靈は邪惡なる者に其心を與ふる事能はざればなり神靈は獨り神々の全集合にして全世界は此神靈中に存す而して神靈は正しく自由意志と衝突せざる原因結果

の連鎖によりて肉体を具へたる靈魂が爲せる動作の連絡を結成す實に此神靈たるや萬有の基本にして此靈によりてのみ有らゆる萬物は存在す然かも此靈や決して五官もて接觸す可からざるもの唯物質世界より全く其心を脱離したる者のみが思料し得るもの然れども思辯に便せんが爲めに之れを想像に描かんかこは之れ極微なる元素よりも極微なるもの純金よりも更に光輝あるものなりとす或は此神靈を火素の中にありとして崇敬し或はメヌ――萬有の主――の中にありとなし或はインドラス(雲と大氣の治者)の中に更に其存在の顯著なるものありとなし或は純粹なる空氣中に或は最も高き永久の心靈中に存在すとして崇拜するものなり彼は五元素の形もて萬有に貫通し萬有をして生と死と解体とによりて車輪の如くに世界に輪轉し遂に終局の至福に達せしむるものなり去れば心に最上者の靈が萬有の中に存するを見るの人は萬有に對して平靜なるを得べく遂に最高至尊の本体に吸收せらるゝに至るべし」

バカワドキタ中にはアルヂユナが其王族と共に戰鬪に臨み敵陣に相知れる人々あるを見て戰を欲せざるの狀を描けり此時リシナ――アルヂユナの御者たりしリシナ――は自己のウイシヌたるを顯現し遠慮なく彼等を殺すべきを慫慂して曰く汝が彼等を殺すは唯「全体者」が定めたる所を行ふの器具たるに過ぎざるのみ而して階級の義務は最上の義務なるが故にシャトリヤにとりては合法なる戰爭よりも優りて善良なるものあるなしと然れども彼は猶ほ言を繼で曰く若しも汝にして此戰鬪に從事せざらんか汝は自己の義務と榮譽とを忘却し且つ罪惡を行ふものなり加之人類は汝を目して磨滅す可らざる恥辱の標本となさん而して高貴なる人物にとりては汚名は死に優るの苦痛なりと吾人が左に掲ぐるは此言說の拔粹なるが其詩の敎訓と調子とを示すに足るものあり

爾は悲む可からざる人々の爲めに悲をなす
爾の言は智者の言の如くなるも
眞正の智者は人の生死に對して
毫も哀念を懷かず
予も彼等も地上の諸王も無始の始めより存じぬ
今後も亦未來永劫消滅する時なかるべし靈魂は此朽つる形躰中に生息して

幼、壯、老の時代を經由す、

かくて亦他の新しき形体をとりて其豫定の行路を新にす

かの生ける宇宙を開發するの彼は決して破壞す可からざる者

誰か此の破壞す可からざる者の工を破壞するを得んや

肉体は永遠の靈魂、永久不可思議なる靈魂を錯まるものにして朽ち果つべき者なりかるが故に戰に勇めバラタよ

何となれば汝が其靈を殺すと思若くば殺さると思ふは之れともに欺騙せられたるなりこは殺さる可からざる者

殺す可からざる者なり、こは生時なく死時なく過去現在未來を貫通するものなり

こは最も古くして永久不變なるもの朽つる形体とともに死せざるものなり、

苟も靈魂の不朽、永遠、無始なるを知らん者何ぞ殺し若しくば自ら戰場に居らるゝを掛念せんや

人は其古き衣裳を脱して直ちに新しき服裝を纏ふなり

靈魂も亦然り其古朽の形体を抛棄して直ちに他の新形体をとりて生れ來る

武器は靈魂を刺殺する能はず炎々たる熱火も之れを燒殺する事能はず

流朗たる水も之を溶解する事能はず

温暖なる風も之れを乾かす事能はず、

刺す事能はず燒く事能はず、

浸す能はず乾かす能はず、

見る可からず名狀す可からざる者なり

かくの如くんば爾何をか悲まんとするか

印度教の大なる教理は實に此の中に宣言せらる曰く靈魂の永久不朽曰く肉体の死滅變易曰く靈魂の輪廻曰く宇宙存在の基本たる最上至尊の心靈――萬物が依て生じ萬物が復歸する最上至尊の心靈――の存在是なり、

印度人の神の觀念が深遠なるものたるは疑なき所なりと雖然かも此觀念や唯半面の眞理を穿てるのみにして極めて不充分なるものなり蓋し印度思想は神の人格、神と人との區別、神の主權正義清潔慈愛としての神の性質を無視するものなり

彼等の思想に從へば道德も不道德もともに絕對者の中に含有するものにして兩者の間毫も眞の區別なるものあるなし而して人間の人格なるものも亦其無視する所にして吾人は人格者なりてふ吾人終局の意識も亦何等の價値を認めざるなり夫れ人は自ら其小なるを認識すと雖宇宙と同倚人類と神とより自身を區別して聊かも混同する所なし去れば人生は一大實在にして吾人各自は自ら自己の生命與奪の自由を有す然かも印度思想に然へば人生は一迷妄たるに過ぎず而して人生の目的は發奮努力して永久に完全の域に進みかくて吾人の眞我を實現するにあるに非ず意志と人格の滅絕詳しく言へば精神的自殺に存するなり、

聖書は熱心に神は智慧なりと敎ふ顧ふに如何なる言語も此智慧文學よりも優りて最上者は智慧者なり諸王と諸士師とは智慧者によりて支配せられざる可からずてふ事を明白に言出し得るのものあるなし然し乍ら聖書は亦神の超自然者にして同時に宇宙の遍滿者たる事實をも敎ゆ回敎と印度敎の正反對の眞理は玆に融和結合せらるゝに非ずや而かも神子化神の事實は吾人をして神の全き眞像が人間の裏に發見せらるゝを知らしむ、此神子化身てふ事實は實にイスラエル人の

有らゆる歷史の中心點にして敎會が依て以て存立するの基礎たり人間眞正の理想の標的をなすものなり聖書は亦神を思念し神の驚くべき言と工とを思料し人生の事實を默想するは獨り人間の特權なりと敎ゆ而してかゝる人間の義務を言出するの著明なるかの詩篇よりも大なるものあるなし然しながら冥想沈思は合法なる實際的活動に其成果を現出し來らざる可からず此合法なる實行によりてのみ人は其品格を完全ならしめ人生の秘密に對する最良なる解釋を發見し得べし單純なる冥想沈思は無爲靜寂若くば不自然なる出世間に終るの傾向を有す

凡神敎說は印度敎の强點にして亦弱點なりき此根本信念よりして種々の神々は案出せられ韋陀經の卅三神は漸次に增加して三億三千萬神を生ずるに至りぬ、則ち波羅門の徒は凡神說の便宜によりて如何なる神をも自敎に採用し如何なる偶像をも是認しそが禮拜に對して哲學的基礎を供給したり蓋し彼等に依れば如何なる新しき神も(よしや如何に不體裁なる神なるにもせよ)亦之れ寂滅の大海に導く無數の支流中の一たるに過ぎず、去れば印度敎徒ならざる者も其舊來の禮拜に固執し其在來の生活に固着し乍ら印度敎徒たるを得べし此故に釋迦はウイシヌ

の第九の化身として承認せられたり而してイエスを第十の化身と稱するをも妨げざるべし但しリシナの禮拜はかゝる宗教組織の下にありては他の禮拜よりも優勢なるを得べしと思はる何となればリシナは有らゆる新時代に降生化身して自己の主權を保持すべしと信ぜらるればなり顧ふにリシナは實に不道德なる神なり此不道德なるリシナを最高者の大現体なりとして承認するは實に凡神教が印度教の弱點にして亦其不名譽たるを表白するものなり蓋し其理想や不道德なり靈性の救濟は人の品性に伴はず善德と惡德とは救濟に對して何等の關係を有せずてふ事を實際に明言するものなればなり然かも吾人は最上の印度人は遙かにかゝる下賤なる理想の外に卓出するものあるを謝せざるを得ず、

印度人は吾人と齊しく大英固の臣民なり而して此事實は歷史が神の意志の現顯たりとの事を信ずる吾等英國民に重大の使命を與ふるものなり顧ふに印度人の教化はパウロの精神もて彼等に臨まざる可からず蓋しパウロやイスラヘル人の「律法と預言者と詩」との中に於けるのみならず亦希臘思想の普及と羅馬の法律文明の壯大との中に基督教に對する眞の準備ありしを發見し依て以て基督教會

を猶太人の一宗派たらんとするより救ひ出したる人にして亦其之れを爲せるが爲めに所謂正統的信仰を代表すと自信したる熱心家輩よりして迫害窘苦せられし人なり夫れ印度は希臘羅馬の如くに基督教に對して貢獻すべき固有の分前を有す、然り印度の預言者輩が世の快樂を侮蔑し見へさる者との感合一和を事とし たるは決して無益の業には有らざりき特に印度は第十九世紀に於て基督教の爲めにそが準備をなし來りぬ而して現時にありては社會上政治上宗教上の大革命は全國に亘りて蔓延し曾て回教の攻擊と佛教の宣教的熱心に打勝ち毫も時代の風潮に影響する所なかりし印度社會の堅實なる構造も今や西洋思想と西洋文明の代表者およびそが器具と自己の活力よりして起り來れる諸勢力とによりて殆んど全く覆滅せられつゝあり而して印度に於ける基督教の勝利は恰も其昔し基督教が希臘哲學および文學又は羅馬の法律政治よりして其善良眞實なる部分を吸收し依て以て希臘羅馬の宗教を壓倒したるが如く正に之れと其性質を同ふするものならざる可からず基督教にして若し此方法によらんか時到らは必ずや他邦に於けると等しく印度に於てもそが勝利を博すべきは疑なき所なり何とな

れば印度人程宗教的なる人種なく印度人程理想に忠實なるものなく亦肉的生活を輕視する者なければなり吾人は印度歴史中に實に驚くべき一時代ありしを知る則ち釋迦入滅後社會の最高階級の人にして佛教宣教師として四圍の國々に巡錫し大なる收獲を納め得たるの時ありしを知る吾人は將來の印度にも基督教によりて亦此事あるべきを信ず誰か此尊貴なる人種(印度民)の活力は己に消滅し盡せりと云ふや願ふに神は必ずや一預言者を起して權威もて教ゆるに印度の再生に必要なる總ての智慧と能力とは基督の中に存すてふ教を以てするの時あるべし而して彼や基督教をして東洋思想に適合するものたらしめ得る事猶ほ初代の四大會議の議決が基督教をして歐羅巴に適合するものたらしめしが如くならんかくて幾千百の宣教師はヒマラヤ山を越へ、遠洋を渡りて亞細亞全州にイエスキリストと其十字架に傑けられし事を信ずる者には彼は神の智慧亦能力たりてふ眞理を隈なく宣傳するに至るべし何となれば基督教のみが獨り印度教の最も深き熱望を滿足せしむるの諸要素を包有すればなり博士ダンカン曰く「凡神教の中には單純なる自然神教が對抗し能はざる深遠なる或物を有す、自然神教は淺薄なり而して凡神教は自然神教よりも强力なる者が起り來る迄は安全に自己の住家を保存なし得べし吾人はイエスキリストにありて這般秘密に對する唯一眞實なる解釋を發見す」と博士ダンカンの此言や何故に回教が半ば成効したるに拘らず却て實際は全体として印度教を强固ならしむるの結果を生せしや而して何故に基督教はそが正當に提出せられたらんには成効普及すべきかの理由を說明するものと言ふべし、

第七章　佛教

佛教が波羅門教と幹枝の關係を有するは猶基督教が猶太教と新教が羅馬教と幹枝の關係を有するに似たり此三教の塲合にありては枝は幹に比して必ずしも夥多の信徒を有すと云ふには非ず然かも枝は幹よりも强力なるものとなり來れり基督教と佛教とはともに偏狹なる地方的宗教より發達したる世界的宗教にして兩者共に今や其生地に於ては殆んど他國人たるの觀を有す、

佛教の開祖は印度人として生活し印度人として死亡したり彼も亦當時の波羅門

教徒も彼が宣傳したる新信仰が舊來の信仰と衝突矛盾すとは思惟せざりしなり顧ふに彼は唯古代よりの韋陀宗教の精神を正實に註疏する者たるを宣言したりしならん然り彼の弟子等は唯其師が印度人中の最大最賢最良なる者なりと宣言するに留まりぬ夫れ印度の歴史に於ては歐州に於て「宗教改革以前の改革者」ありしが如く釋迦以前にありて己に業に波羅門教もて滿足せざりし幾多の聖賢なる者ありしなり然れども釋迦は實に印度のルーテルなりき彼が擧げたる絶叫は有らゆる前代聖賢の絶叫に結合し其人格は長き久しき以前より集合し來れる幾多の精神的活力を体現して生々たらしめ依て以て印度全州を一掃するの大運動を創始し一時なりとも古代宗教の遺習制度法規を埋沒し去るの壯觀を呈せしめぬ

かく佛教は――印度教と異なりて――釋迦てふ一人物を其教の中心となす。ものにしてそが大宗教たるの秘密は實に釋迦の生涯と教と人格とに存す。然れども釋迦の生涯と其性格との研究が近世の佛教を傾倒するに大なる助をなすべしと想像するは大なる誤謬なり蓋し佛教のものたるや其始め人類教の一組織に過ぎずして未來生を信せず完全なる人間以上に位する神を信せざるものなりしが

遂に種々の矛盾撞着せる教理および凡俗間に於ける種々なる偶像禮拜とは化し了りしものなり、モニエルウイリアム曰く「佛教は明白なる無神教唯物説よりして有神教即ち多神教および多靈教とはなれりこは一面は厭世教にして他の一面は純然たる慈善教なり一面は行者的共産主義にして他の一面は高尚なる道德なり一面は唯物哲學の諸形にして他の一面は單純なる惡鬼禮拜なり而して亦他方より見ればこはト筮妖術、偶像禮拜、庶物崇拜を含める迷信の混合物に過ぎず」と去り乍ら何れの宗教にもあれ其勢力の存する所を發見せんと欲せば之れを其宗教中に含める觀念および其開祖の人格に求めざる可からず何となれば是等は實に宗教の活泉なれば假令そが幾世紀間土砂浮木もて掩はるゝ事あらんも人は此塵芥を排して其源泉を發見するの時あるべく而かも之れを掬するによりて生命の水の滿々たる大河――萬國民の渴望を醫するに足る程の大河――が滔々として流出し來るを見るべければなり。

佛教の聖經――佛教の聖經には二つの區別あり一は南方佛教の聖經と稱する書物の集合体にして一は北方佛教の聖經と稱する夫れなり吾人は何時頃釋迦の

教が始めて文字に記述せられしやを知らず釋迦自身の時代すらも正確に知る事能はず支那の一記錄に從へば釋迦の生時を紀元前第十九世紀にありとなせども印度古代の碑銘には紀元前第三世紀中に生死したりとなすもの少なからずセイロンの佛教徒は釋迦入滅の時を紀元前五百四十三年となし來りぬ而して此說たるや幾多の通貨と碑銘によりて間接に確定せらるゝの說にして一時は一般に是認せられたる所なりき然れどもライスダウイッドは更に之れを百年丈短縮せんと欲しサー、モニエル、ウイリアムスは「吾人は釋迦の誕生を紀元前第五世紀頃にありと定むるが誤りなきに近し」と言ふを以て滿足すと謂へり南方の經典は之をッリピタカ即ち三藏と稱す三藏とは三筐の意にして始め此經典の紙葉が離れ離れに三筐中に藏められたるより命名したる所なり而してそが經典として是認せられしはかの佛教のコンスタンチン帝なりと稱せられ而かもコンスタンチン帝より幾層倍善良なりしアソカ帝の保護の下にカンヂス河邊パタリパトにて紀元前二百五十年頃に開催せられたる佛教會議の確定する所に依るなり今夫れ此三藏たるや殆んど聖書に倍したる紙數を有し、パリ語――此語の起源に就ては一定

の說なし多分梵語の變化したるものなるべく其當時は釋迦出生地の地方語なりしならんと思はるゝパリ語――にて記述せられたるものなり傳へ言ふアソカの子マヘンドラが其姉妹サンガミトラと共に托鉢僧としてセーロン島に渡るや此經典若くは此經典の一部分を携へ島民を敎化したりと免も角も佛敎はセイロン島よりしてバルマ、シャム、および附近の島々に傳はり(假令印度には拒絕せられたりとも)今日迄其命脈を保持す、

夫此三藏たるや佛敎の最も初代の文書なりかのアソカ王が即時聖典の蒐集に從ふべしと命じたるの上諭は既に釋迦の敎が筆傳せられ居りしを證する最古の證據にして聖典(三藏)中に存する超自然の事柄は釋迦の死とアソカ王の上諭に跨る此二、三百年間に發生し來りたる傳說たるや疑なし然ども釋迦が其弟子を敎ゆるや四十五年の久しきに亘るが故に釋迦が敎へたる主要の敎義が忠實に保存せられしや亦疑を容れず佛敎の古譚に從へば此三藏たるや釋迦入滅後直ちに殆んど五百人の弟子等によりて開かれたる第一會議が編成する所に屬す則ち此會議に於て之れが議長たりしケーシアパ――弟子中にありて最年長者亦隨一の學者

たりしケーシアバ――は自ら記憶する哲學的教義を詳報したり論藏は則ち之筆記なれがパリリウ――下等階級の人なりしも誡律と行爲に關しては大權能ありしウパリ――は佛教の律法規則を詳報したり律藏は即ち之れなり最後に釋迦の從弟たるアナンダ――二十五年間親しく師に事へ亦師を顧慮したるアナンダ――は釋迦が種々の場合に說法したる譬喩および說教を記憶に從ひて繰返したり藏經は則ち之れなり顧ふに經典の萠芽はかくの如くにして形成せられしならん然かも經典內都の文句に徵すればこはかくの如き古代よりして現在の儘に編成せられしには非ず、

北方の經典は不良なる梵語もて記述せられたるものにして、そが一記者が期待せしとは全く異なれる宗教を形成するに至りたるものなり然れども北方佛教は世界の佛教徒の大部分を包有するが故に自ら大乘佛教と稱し南方佛教は小乘佛教とは呼び做せり今夫れ諸國に於ける大乘文學は非常に廣瀚なるものにして之れに通曉せん事は人壽の短日月を以ては到底能くし得べき所に非ず例せば教授ビールが支那語の三藏が英國に渡來せし際印度大臣の命によりて計算したる報告

に依れば其經典の廣瀚なる若し其行季を積み重ねんか其高さは實に百二十尺に達すべしと然り而して此曉多なる書物は概ね原語よりして翻譯せられたるものにして印度人パルス人、ハン人の如き外國の教師等の手に成りしものなりとす支那譯が此の如く廣瀚なるの事實は基督教紀元の初期に當りて「未曾有の精神的活動」が廣く支那國に勃興流布せしを證するものなり、大藏經の西藏譯は第八世紀頃博學なる印度僧等が佛教徒たる一王の懇請によりて翻譯したる所なるが亦實に廣瀚なるものにして六百八十九書より成れり而してそが原書たる梵語の經文は多くは堙滅したるが故に是等の譯文は之れが研究者――東洋學校派(ゴーナシズム)の空想が近世印度佛教およびラマ教の起源を知るに必要欠く可からざるものなりと信ずる研究者――にとりては極めて價値あるものなりとす、

是等の經典中に基督教に酷似するものあるの事實は始め學者の怪愕に堪ざる所なりしなり或は佛教は基督教より古きが故に佛教は基督教の父母ならざる可らずイエスと新約書の記者は佛教思想とそが古譯とに接觸せしや必せりとなし或は(ヂエスイット派の教父等は)惡鬼が約束の救主の生涯を詳しく前知して之を嘲

笑せんが爲に釋迦てふ人物によりて之が先鞭をつけたるなりとなし或は佛教の經文は一時に編成せられたるものに非ず漸次後世の作を添加したるものなりと論爭したり而して此後者は眞實なる解説たるを失はず教授オルデンベルグ曰く「佛陀の傳記は古代より傳へ來りしものに非ず則ちパリ語經文の時代よりして傳來せしものには非ず吾人は此時代には釋迦傳なるもの存在し居らざりしと云ふに躊躇せず」と博士イテル曰く「佛教の書物中には一として其時代の古きと其純正の疑ふ可らざるとに於て福音書中の最も古き文書に比敵し得るものなし而して最古の佛典中には釋迦の生涯に關する詳細の記錄なし基督教の特有なる事柄に關しては何等の記事もあるなし」と去れど若しそが經典中に他より借り來れるものありとすればそは其何たるを問はず佛教の學者輩が挿入潤色したる所たる事論なし但し彼等は一方には文學的觀念に富み他方には歴史的思想に乏しかりしが故に其挿入潤色は極て非歴史的のものとは成り了りしなり要するに現時の學者輩は皆一齊にキユチンの結論に同意す曰く「予は基督教の起源に僧侶が最小なる直接の影響すらも與へたりと言ふを避けざる可らずと斷言するを憚からず」と、

佛教教祖の歴史――悉多(シッタ)は迦毗羅蘇都(カピラソツ)(現時はブイラの一村)即ちペナレスの聖市とヒマラア山脈との間に位する一小都の君主の子なり、姓を瞿曇と稱す釋迦は其種族の名なり去れば悉多が世捨人となるや彼は釋迦牟尼即ち釋迦の僧と呼ばれたり佛陀てふ語はブット即知てふ語原より來れるものにして普通名詞なり、則ち若し熱心以て覺りの境界に達せんか彼は佛陀の境界に達したりと言はる、此の故に佛陀てふ名は本來の佛教が智力を尊崇する波羅門教の根本主義と同種類に屬することを明示するものなりとす

今夫れ悉多即ち瞿曇は如何なる行歩をとりて覺者たるに至りしや彼の生涯の初期に關しては正確に知る所少なし而して亦正確なる事實と其信徒等の熱心が造り出したる古譚とを區別するは決して容易の事に非ず然れども彼等に作出添加せられたる古譚を外にしても釋迦てふ人物が實に非凡の人物たりしや更に疑を容れず然り彼の私心なき生涯眞理の渴望人類に對する慈悲は萬世に亘りて尊重怠る可からざる所なり實にセントヒレールの言へりし如く「基督を外にしては宗教の開祖にして佛陀よりも純潔なる人物なく佛陀よりも感佩すべ

き者あるなし彼の間斷なき勇行は其確信と相一致して兩々相等とし彼は亦彼が說法せる諸德の權化にして其完全なる模範たり彼の克己慈悲不變の溫雅は頃刻も滅失する所なきが如し」彼の弟子等は彼を模倣し基督敎國の歷史にも存せざる熱心と自制と成効とをもて其信仰を傳播したり、而して佛陀の宗敎は決して暴力と迫害とによりて自宗の傳播を願はざる唯一の世界的宗敎にしてそが權勢を得るの時すらも決して玆に出でざりし宗敎なりとす、

粗墨は生國の習慣に從ひて若年にして隣國の君主の娘を娶り交情甚だこまやかなりき、彼は体力と智力に充ちたる心情と、生活の純潔なるとによりて名聲ある人なりき已に此の如し然かも彼の衷心欠乏を告げて已む所なかりき則ち彼は尊貴なる靈魂が感ずる「神聖なる不安」を懷有したり、此不安たるや權勢も榮華も家庭の勢力も其職責の義務も蠱惑し去る能はざる所のものなりき彼が結婚の後十年にして得たる一男兒の出生すらも彼の心を滿たすに足らざりしなり然り此破り難き肉身の新情繫は反て彼をして一切を打ち捨てゝ其向上性の鼓舞に從ひて「其行く所を知らずして」出で行くの決心あらしむるの動機とはなりしが如し彼は老、病、

死亡の活畫に對して「此終りなき無常苦痛と見ゆる人生の意義は何ぞや」てふ問題を思考するを禁ずる能はざりしなり彼が見て以て時間と肉體の勢力との外に超然たりとなせるものはかの世捨人――人世の羈絆と有ゆる世上の關係を脫却して靈界に生息し托鉢の際すらも其尊嚴を失はざる世捨人――なりき吾人は玆に東洋人特に印度人が生來人生に對して樂觀よりも寧ろ悲觀に傾くものあるを記憶するを要す、且つ印度に於ては輪廻の信仰一般に普及するが故に心あるの人士をして存在てふ事に對して深き嫌惡を有せしむるに至れりこは亦釋迦をして彼が此不可思議の世界に對して有したる疑惑の重荷と相待ちて彼の心に一段の厭世思想あらしめし所因たらずんばあらず然れども人生の秘密は之れを解釋するの道なかる可からず而して若しも人生の解釋にして之れをなし得んか此智慧に對しては世の一切の智慧は數ふるに足らざるものなるべし去れば釋迦は人生の秘義を發見するを以て必要至極の事なりと確信し其二十九歲の時富と權勢と家庭と兩親と妻子とを捨てゝ佛者の所謂「大放棄」をなし美服に換ゆるに襤褸を以てし苦學者として當時に有名なりし世捨人の敎師等の門を叩き彼等の思索を

究め韋陀經の默示を學得し以て現世の羈絆を脱して普遍の靈魂に合一するの方法に關して波羅門教が教ふる全部を學び得たりと雖彼は之れに滿足する事能はず自ら五人の弟子を引ひて藪地に退き正當派なる波羅門教徒が說く所のものを實踐躬行してそが眞否を試驗せんとは試みたり今夫正當派波羅門教の說く所に依れば靈魂は難行苦行によりて肉体の羈絆を脱し超自然の力を得遂に救拯に達すべし此方法に依り亦絶へずオムてふ神秘なる詞を唱へ加ふるに其心をブラマ――宇宙の本体にして有らゆる世界は其外緣に過ぎざるブラマ――に專注せば人は必ず最高者と合一するに相當はしき者たるに至るべし而して彼は漸次に超自然の力を得其心は萬世を視るを得べく物体は彼にはエーテル海面に浮動する水泡の如くに見へん而して遂には思考思索てふもの全く止み、人格は消失し靈魂は有限の檻を脱して奥深き靈魂に沒入し輝ける神海に永久の生を樂むべしとなすにあり釋迦は六年間に亘りて此方法によりて靈魂の自由を得んと苦行したり而してそが苦行の嚴酷なる印度に於ける世捨人にすらも稀に見る程のものなりしなり、彼が後年の自言に依れば「何人にても効德と苦行とによりて救はるべしと思惟する者あるか我は其一人なりしなり」と然れども彼は遂にそが不充分にして完全の道に非らざるを發見したり於是乎彼は遂に――其苦行は進んで一日綏かに一粒の米を用ゆるに過ぎざるに至り之れを聞傳へたる多くの人々の稱讃を博するに至りたる時――俄然たる嫌惡の態度もて彼は此苦行を斷念し通常人の如く飲食し始めたり、こは五人の弟子にとりては實に變心背教を意味するものなるが故に彼等はそが彼にとりて最も彼等の同情を要する時なるにも拘らず彼を棄てゝ聖市ベナレスに歸り彼等が多くを期待したる一人(釋迦)の失敗を悲げに言ひ觸らしたり、

果して然らば苦行は以て彼をして平和若しくは救拯に達せしむるの道には非ざりしなり釋迦は是に於てか苦行の徒勞を自白して家庭に復歸するの念に堪へざりき彼が自國に對するの義務は彼をして一厨還家の情を禁ずる能はざらしめたり、彼は此等の誘惑および其他の諸誘惑と角力戰鬪して煩悶止む事なかりき一日彼は其單純なる朝饌を喰せんと欲して一無花果樹――爾來佛教徒にはバー樹即ち智慧の樹として尊崇せらるゝ事猶ほ基督教徒の十字架の如くなる一無花果

樹――の下に座し其處に終日終夜冥想し反省し亦思索したり翌朝日出とともに眞理は彼の心に赫灼として其曙光を放ち來りぬ是に於て彼は自己の不安と不幸とが其慾望に因由するを發見し併て人間其物は慾望に比して更に偉大なる者なるを悟るに至りぬ、人は己に其慾望に比して更に偉大なる者なり然らば人が其慾望の奴隷たるは眞に理由なき事にはあらざるか、こは實に釋迦にとりて悟道の時なりしなりかくして彼は肉慾願望不幸に對して永久に超然たらんが爲には人は唯自己に對して眞實ならざる可らずてふ公然の秘密を發見したり彼は內部の教育と自愛に代はる他愛とによりて諸の慾望を熄滅せんか人生の秘義は茲に解決せらるべしてふ眞理に悟入したりかく悟入したる釋迦にとりては此單純有力なる救拯法――劣等なる自己より特更に個人的永續の願望より救ひ出す此救拯法――の前には祭祀苦行は其顏色を失ひ韋陀も其超自然的權威を失墜したりと見へしなり而して階級制度は唯之れ習慣に過ずして神の存在も必要なりとは見へざりしなり釋迦の世界觀は茲に全く一變したり、萬有は彼に對して新たなるものとはなりぬ是に於て乎荒野は喜び無人の地も讃美の唱聲に滿ち亘りぬ、

今夫れ釋迦は吾人の見解に從へば果して如何なる立場に立てるか曰く「聖靈の鼓吹に依りて其生命を得と欲する者は之を失ひ其生命を捨つる者は之を得べし」てふ眞理に洞察し到りしなり、彼は此眞理に洞察し到りしと雖然かも彼は此深奥なる眞理の根底およびそが有らゆる關係をば知悉する事能はざりき何となれば彼は靈魂および生命の根底たる神によりて之れを見る能はざりしが故なり然かも此眞理たるや神より離れては遂に人類を支配するに足らざるを如何せん但し釋迦は其洞見し得たる所のものを深く樂みたり彼が救拯の道を概括して示せる短詩は其音調イスラエルの夫れに相似たるものあり、

凡ての罪惡を止め
德を積み
心を清くするは
之れぞ佛陀の宗教なる

釋迦は此方法によりて慾望を脫し從て彼にとりて堪へ難き重荷たりし無窮の輪廻の不幸を免かれ得べきを觀想したり、此時よりして眞理は超自然的默示の如く

に油然として彼の心内に湧出し地上の鐵鎖は全く彼より脱落し去りぬ是に於てか彼は佛陀の稱號を自稱しつゝ決然たる相貌――其學び得たる貴重なる秘義を人類に敎ゆべしと思ひ定めたるを表示する相貌――もて荒野より出で來りぬ爾來彼にとりて明白なりし二眞理あり(一)人は內部の敎育と愛の實行とによりて救はるべしと云ふ事および總ての犧牲も苦行もともに死業たりと云ふ事(二)平和と救拯の道は何人も之れに入るを得べしと云ふ事之れなり釋迦は此二眞理を自ら四大確說の形に言出たり曰く(イ)苦痛若くは悲哀は存在てふものあるが爲めなり(ロ)こは慾望より來る(ハ)苦痛と悲哀とは慾望の征服によりて滅却するを得べし而して此征服はこれぞ即ち涅槃の境界なり(ニ)涅槃に達するに道あり、と此確說の第一は即ち釋迦をして其家庭を離るゝの止む可からしめたるものなり夫れ存在は如何なる存在なりとも必然に苦痛を含有するものなり、生、死、病、無病、齊しく苦痛ならざるはなし、去れば存在は寧ろ存在せざるに如かず然らば存在は如何にして之れを滅却せんか死は決して之れを滅却する所以に非ず何となれば因果の法則は誤る可からざるものにして一個人の死は其効德若しくは罪業の如何に準じて直ちに他の形体をとりて再生すべければなり、こは實に釋迦の根本假定なりき此故に吾人にして若しも永久に苦痛を脫せんとならば存在の原因若くは其種子を破碎し去らざる可からざるなり、

第二の確說は原因の發見なりき有らゆる苦痛は三種の肉慾若しくは慾望――体慾富生命の三慾望――より來るものなり、去れは慾望は之れを其根底より拔去らざる可からず抑も願望なるものは無知より起るものにして人を肉体てふ牢獄に箝束するものなれば吾人にして一に慾望を滅却せば存在より流れ來る間斷なき不幸は之れを脫却するを得べし、

第三の確說は療法の發見なりき吾人は此處に至りて佛敎の特有語に到達す涅槃および効德てふ言是なり涅槃てふ言の通常の意味は滅(火の如く)沒(太陽の如)死(已に逝去せる聖人の如く)の意味なり釋迦が用ひたる意味は人の思念と心情とに於ける斷へざる慾念の消滅にあり蓋し此慾念にして消滅せざらんかそは業報てふ不可思議なる法則に從ひて更らに新しき個人(我)を生出するの原因となるべければ業法とは何ぞや詮ずるに各人の今生の狀態は前世に爲せる行爲の繼續お

よび精確なる結果なりと云ふ事なりとす有らゆる世界は因果てふ極めて嚴酷なる法則によりて成出し變化し消滅す此法則たるや實に神若くは神々の位置に位するものにして宇宙人生を支配せる活ける鐵則たり然り而して此の教義(吾人の播く所のものは亦之れを刈り取らざる可からずてふ此教義)は吾人か前生に爲せる行爲に迄も其範圍を推し擴めて以て思惟すらく吾人が過去に爲せる行爲の結果は今生にて終るべきに非ずして吾人はそが結果として再び何物にか形を變へて此世に生れ來らざる可からず但し吾人にして惡しくば死して地獄に陷り幾千年間彼處に苦しまざる可からず而して此長年月の苦痛の後には植物若くは蟲となりて再生し來るべし而して此憐むべき境遇を更めて高等なる生活壯態に復歸せんが爲めには努めて正しき生涯を爲さゞる可からずと去れば死滅は自からかゝる怖ろしき將來を脱却するの樂土と思推せらるゝなり要するに釋迦にありては輪廻說は變はりて業報の教義とはなれり今夫れ佛教は人間に靈魂の存在するを承認せざるが故に存在の一狀態と他の狀態との間に存する連鎖は靈魂其物に非ずして行爲其物なりとす則ち行爲を中心として新らしき外形若くは肉体は形成せられそが物的性質も感覺も觀念も思想もともに過去の行爲に相當はしきものとして現はれ來るなり別言すれば前生の行爲は今生の生地性質將來を決定するものなり、

釋迦は輪廻說を承認する能はざりしが故に之れに代ゆるに業報てふ神秘說を假定し今生に於ける幸不幸の道德的原因とはなしたり別言すれば釋迦の主張は靈魂の輪廻に非ずして行爲に依れる形体の變化にありとす但し各人は其業報として生を變へ代を重ねて變形し來りしとするも若しも佛陀の法則に從はんか彼は涅槃に到達し其存在を脱離し玆に其業報の苦海を脱するを得べし、

第四の確說は佛教の道德および宗教の律法の基本をなすものなり涅槃に達するの道は四重の中道に從ふにあり而して此四重の中道は分かれて八つとなる則ち佛教に對する正しき信仰、僧侶となるの妨礙たる凡ての羈絆を打ち捨つる正しき決心、正しき言語即ち佛則の唱誦、正しき行爲即ち僧侶たるの行爲、正しき生活即ち布施によれる生活正しき勉力即ち克己、肉体の不淨と無常とに對する正しき注意、正しき思辯詳しく云へば無我的靜安なる心的狀態是なり而してこは實に四重の

段階をなす（ライスダビッド氏佛教百八―百十頁）以上の四確說は釋迦が其根本思想となせる所なりしも夫自らのみにては佛教をして其非常なる成効を爲さしめたるものには非ず釋迦は此四確說の上に道義的組織を打建てたり但し此道義的組織たるや其精髓に於ては波羅門教の已に有したる所にして基督教以外の諸宗教に存するものに比すれば遙かに卓絕したるものたるを失はず加之釋迦は東洋的生活と習慣と思想の有樣とに善く適合したる僧徒の團体組織を建設したり釋迦將に死に垂として其弟子に告げて曰へらく我逝かん然れとも我教へたる眞理の證者として我に代るべき二者を以てせんと二者とは則ちダルマ（法）サンガ（僧伽）是れなり、去れば今日に至る迄新たに佛教を信奉して僧門の一員たらんと欲する者は誓ふに「我佛陀と法と僧伽とをもて我避所となす」と云ふ事を以てす詳しく言へば予は佛陀の生活を摸範となし佛陀の教と法とを承認し恩愛の契りを斷ち社會と財寶とを放棄して僧となり襤褸を纏ひ日毎の食を乞ふを以て滿足すべしとの誓約をなす然り而して佛陀、法、僧伽、の三者は萬事を人格化するの傾向ある東洋思想によりて古くより神々の位地に引き上げられ人間避難の三避所として其名は祈禱によりて懇

請せられ寺院に於ける三大偶像とはなりぬ、釋迦は衆人に對しては五戒を授けたり曰く殺す勿れ、盜む勿れ、姦淫する勿れ、僞りを言ふ勿れ、飲酒する勿れ、と此中初めの四戒は已に波羅門教に存する所にして最後の第五戒は釋迦自身の附加する所に屬す、彼は亦僧侶團体の各員に對して更に五戒を授けたり曰く禁ぜられたる時間に食す可からず、歌、舞、音樂、および世俗の歡樂に近く可からず身に粧飾を施し香氣を帶ぶ可からず高き廣き臥床につく可からず金銀を受取る可からずと此中金錢を受取る可からざるの戒律は最も大切なるものとして久しく遵奉せられたれども然かも寺院は遂に財寶と莫大の歲入とを有するに至りぬ釋迦は謙讓と限なき忍耐と寬恕とおよび其他の慈悲善行の諸德を丁寧に教へたり而して此諸德たるや印度國の如く搖籃より墳墓に至る迄殆んど皆諸種の苦痛に暴露せらるゝ國々に必要なるものにして從つて印度人の如く天然に温和善良なる性情の人種に最も適合する所のものなりとす、

然れども佛陀をして然かく成効あらしめし大秘密は其四確說に非ず其道義的教訓にも非ずして實に其人格に存す然り彼が建設したる佛教なるものは彼の人格

なしには直ちに滅亡す可かりしものなり實に彼の人格の勢力は如何に大きく之れを見積るも決して過當なる事能はず次の物語りは彼の人格と其教訓の方法と併びに彼が其弟子等を鼓吹したる精神を伺ふに足るものあり

パルナてふ一富商新たに教を信奉して世の有ゆる羈絆を脱して隣邦の蠻人中に佛教を傳へんと決心したりしが釋迦はあらわに彼を止めんと試みて曰く

「汝が汝の居を定めんと欲するスロナパランタの民は暴戾殘忍にして怒り易く猛惡にして無禮なり若し彼等にして汝に語るに暴慢の言語を以てし汝を攻擊し汝を罵詈せば汝將に何をか爲さんとするかオーパルナよ」と

パルナ答へて曰

「彼等にして予に語るに暴惡無禮の言語を以てし而して予を罵詈せんか予は正にスロナパランタの民は手をもて若くば石もて予を打たざるか故に善良温和の民と思惟すべし」と

「然れども若しも彼等にして汝を打たば如何に思惟すべきや」

「彼等は予を打つに棒を以てせず劒を以てせざるが故に予は彼等を善良温和の民と思惟すべし」

「然れども若しも彼等にして劒を以て汝を打たば如何」

「彼等は未だ全く予が生命を奪はざるが故に予は彼等を目して善良温和なりとなさん」

「若しも彼等にして汝の生命を奪ば如何」

「彼等は只暫しの苦痛によりて此不淨なる肉体より予を救ふが故に予は正にスロナパランタの民は善良温和なる民なりと思惟すべし」

釋迦曰く「善哉パロナ、よ、汝は其完全なる忍耐もてスロナパランタ人の中に住居すべし、行け汝パルナよ、汝已に救はれたり亦他人を救ふべし、汝已に彼岸に達したり亦他人を彼岸に導くべし汝已に慰安を得たり亦他人を慰籍せよ、已に完全の涅槃に到達したり亦他人を之れに導き到れ」と、

パルナ是に於て其使命に趣き以て成効したりと云ふ願ふにかく迄で一人が他人を教化するの力は吾人之れを神の靈てふ名稱もて稱呼するを得べしマホメット、孔子、老子、および印度教代々の改革者は皆夫れ夫れ神の靈を有したり然かも釋迦

世界の諸宗教

程に之れを有したる者はあらず實に彼は天父が限なく聖靈を與へたる彼(キリスト)に最も近き人なりしが如し、但し彼は人間の思想と意志に超絶せる一人格(キリスト)よりして何等の示顯をも得ざりしが故に其教は遂に失敗に歸せざるを得ざりき、

釋迦は最初自己の信仰を他人に宣言すべきや否やに關して躊躇したり、彼にとりては其之れを宣言するよりも寧ろ悟道平和に到達したる結果として一切の行動を停止することそ、そが義務なりと見へしなり、後代の古譚に從へばマラ(惡鬼)は此事を彼に暗示して曰へらく「幸なる者よ爾は多大の苦痛もて此(教義法)を悟り得たり去れば何故之を宣言せんと欲するか、慾望と肉慾とに役使せらるゝ俗輩は之れを了解せざるべし此故に靜居して涅槃を樂めよ」と然れども釋迦は彼の信條よりも偉大なる者なりき彼は荒野を出てゝ先づ曾て七年間己れを教へたる二波羅門僧の許に至り自己が得たる救の道を宣言せんとしたり然れども二者の已に死逝したるを知るや則ち彼が苦行を斷念したる時彼を棄て去りし五人の弟子の許に至り說くに其四大眞理および兩極端――五官の奴隸たる生活と難行苦行の生活

――を避けたる中道を以てしたり彼等は之れを信じたり何となれば彼れ程に愛すべく親むべき教師なきのみならず亦其說く所に權威ありしが故なり彼等は釋迦が設けんと欲せる團體の最初の團員とは成りぬゃサと稱する貴族の青年も之れに次で改宗者となりかくてゃサの四人の朋友も改宗者となり次に同階級の五十人以上もかの誓言をなして僧門に入れられたり是に於て佛陀は此六十人の弟子をば各方面に遣はし彼等が聞ける所を他人に教へ亦說かしめたり、彼曰く「今爾等行け、而して此貴き法の車輪を回轉せよ」とライスダウットに從へばこは「眞理と正義の世界的王國の王車の車輪を回轉せしめよ」と云ふ事なり蓋し車輪は主權の印にして車輪の回轉者は王車をして故障なしに全世界を回轉せしむる者を云ふなり、

次の四十五年間にありては釋迦は天氣晴朗たる時候には各所に其教を布教するの旅行に費やし六月より十月に至るの候は重に雨天勝なるが故に退ひて專ら弟子等の教養を事としたり彼が此四十五年間に爲せる種々の事柄就中彼が其故山を見舞へるの話は極めて興味あるものなり則ち彼は其曾て王たるべかりし市邑

に足を運びて托鉢僧として手に托鉢を持し家毎に其喜捨を乞ひたりしが彼の老父は彼に乞ふに王宮に來るかさなくば他所に去つて彼が棄てたる王家に恥辱なからしめん事を以てしたり、佛陀は平然として答へて曰く「オー王よ爾は曾て王たりし爾の祖先に對して善く其義務を盡す然れども予は古代の諸佛陀の子孫なり而して彼等は其食を乞ひ常に施物によりて生活したり」と釋迦が自ら死期の近けるを自覺するや彼は其親愛せる從兄弟にして亦忠信なる弟子たるアナンダに左の如く語りぬ、

オー、アナンダよ我今已に老ひぬ我年已に滿ちて我旅行(人生の旅行)も將に終りを告んとす予は已に八十歳に達したり、磨滅せる車のそが回轉に多大の注意を要するが如く我身体も之れを保存し行く事困難とはなれり予が自ら身体の安靜を感ずるは唯冥想に耽る瞬間のみ予は逝かん去れば將來にありては汝は自ら汝自身の光、汝自身の避難所たれ、決して他の避難所を探がす勿れ、眞理をば汝の燈火として固く捕へて離す事勿れ、眞理をは汝の避難所として固く捕へて失ふ事勿れ、汝自身の外何人をも汝の避難所として仰く事勿れ」と、

而して彼が將に死に瀕するや衆僧に向つて云へり曰く「オー諸僧よ我今汝等に勸告す、一切の諸物始ある者、必ず消滅す去れば汝等勵みて完全の域に達すべし」と、こは之れ釋迦の最後の言辭なりき彼は其久しき以前にありて胸中已に慾望の火を滅したり、而かも今や彼は冥想の四段階を經由して無慾寂滅の境界に達し茲に生命の火を滅しぬ、

今夫れ佛陀が何故にかくも成功せしやを了解するは極めて難事には非ず彼が人格の高きと何人にも明白なる彼が犧牲献身とは印度民をして喜びて彼に傾聽せしめしなり、(蓋し印度民は何等の宗教の教師なりとも若し其生活にして現世を輕侮し專心靈界に奉事する所あるを見は之れに從ふに躊躇せざる人民なり)佛教は亦一時は未曾有の實際的宗教の最高なるものおよび波羅門僧侶の非常なる虛僞宗教上の特權に對する政治的民主的反抗として普通人民に宣傳せられたり、去れば佛教は波羅門教の勢力が甚だ映盛ならざる印度の一地方に其根底をとりぬ而してそが聖經なるものは純粹高等なる梵語もて書かれざりしなりシャトリア階級は心ならずも波羅門族の虛構に服從せるものなるが彼等は非常なる熱心もて

世界の諸宗教

此新信仰を信奉したり國主は代々舊信仰に反對して新信仰を扶植するにつとめたり、之れ實に佛教が成効したる原因なるが之れを外にしても時勢はかゝる精神的運動を作爲するに恰好の時代なりき恰かも羅馬帝國に於て古代の神々に對する信仰消失し人民の不道德はエピクテタスの極端なるストイック主義に對する反動として起り來りし如く若くは第十六世紀に於ける歐羅巴の僧侶および僧職の腐敗が宗教改革の絶叫に人民の良心を傾向せしめ新運動に大勢力を與へたるに異ならず佛教は亦多數人民には自由平等友愛の防護者の如くに見へしなり、勿論釋迦の最初の自的は托鉢僧の一團体――涅槃に達するに必要なりし團体――を組織するにありしなり然れども多數の人民も彼が四海兄弟の教に強く牽引せられて平教徒としてそが團体に附屬する事となりぬ彼は亦普通人民には普通人民の言語もて語り彼等が喜ぶ文學――例せば問答、比喩、寓言、反覆――もて其言を高調したりモニエルウイリアム曰く「想ふに彼は印度に眞の説教てふものを始めたる嚆矢なりき而して彼はその實際的方法によりて雲上の智識を各人の門戸に取り來れるが如し」と、

世界の諸宗教

佛教は其大なる聖的欠陥の一によりて人を蠱惑するに足るものを有す則ち佛教は徹頭徹尾個人主義を唱へてそが有する道德的社會的政治的勢力に加ふるに第十八世紀に於ける獨乙のイルミニズムをして歐州に廣布せしめたると等しき刺激を以てす別言すれば佛教は人の自足心に訴へて自己一人の勉力のみにて完全なる智識と正義に到達し得べしと宣言す去れば人は其了解し能はざるものを信ずるの義務なく、人の理性は宇宙の深奥に透徹して其眞相を明らむるに相當はしきものなり從て天啓の必要あるなしとなす、

佛教と波羅門教との間に存せる久しき爭鬪――寧ろ印度に於ける相互間の影響――に關しては吾人は知る所少なし、顧ふに幾多の地方的迫害ありしならん然れども印度教は之れを劒槍若くは刑具に訴ふるものには非ず其本來の性質より云へば印度教は寛容なる教にしてそが階級制度に容喙せざる限りは何物をも忍恕したり而かも佛教の傳道は獨り説法に依るのみにして獨身生活者をして之れに當らしめたるは印度教の精神に類似せるものありしなり紀元前に於ける希臘の觀察者が書き遺せる記事および紀元第四世紀より第七世紀の頃に佛教の聖

地を見舞へる支那巡禮者の記錄に從へば當時に於ける印度の諸宗教は皆相併んで平和なる存在をなし毫も軋轢爭鬪の跡なき事今日に異ならずかの有名なるエロレーの諸窟は多分第三世紀より第七世紀の間に成れる驚くべき彫刻もて充滿するものなるが「波羅門教者佛教者ジナ教者の諸窟は相並んで存在す想ふにそが墓中の同宿者(死者)は必ずや現時の歐羅巴に於ける英國教會教徒、羅馬教徒、メソヂスト教徒の如くにともに公誠なる朋友的寛容もて生活したるなるべし」事實を言へば佛教は印度教よりも一層偶像教とはなりぬ、而して漸次其特質たる過大の厭世教、無神教たるの趣きを失墜したり然り若し大國の王者にして佛教を信せんか多數民衆は從て之れを信奉したるが故にかゝる民衆が有せる萬有活物(アニミズム)說は佛教と相混じてそが特色を滅却しそをして波羅門教の維持に最も力ある階級制度に對する制限をも欠如するに至らしめたり、かくの如くにして佛教は其特性と道義力とを失墜し去りぬ加之舊宗教は平等友愛てふ佛教の平民的特色を併呑し或場合に於ては階級制度の滅却に關する佛教の教旨をも併呑し去りて自家藥籠中のものとはなしぬ而して舊宗教は尙ほ進んで印度の諸英雄をばアクタルス即ちウイシヌの子孫なりと稱し以て民衆の想像と心情を自教に挽回し來りぬ按ずるに佛教、ウエシナビ教セイビ教はともに其思想習慣を交換したりかくて佛教は特殊の宗教としては滅去し去りて久しく印度に其領土を失ふに至れり則ち古宗教は佛教を其手中に擁して其生血を吸收し去りぬ然れども印度教も亦釋迦の精神に同化する所ありて吾人をして今日も猶ほそか起源を「溫和なる印度人」――自ら柔和謙遜なりと自稱せる彼の弟子が呼び做せる「溫和なる印度人」――にとれるを追溯し得せしむるものなきに非ず、

第八章　佛教の成効と失敗

吾人が見來れる諸宗教中にありて佛教程　効の希望洋々たるもの非らざるを見る然かも佛教に關する歷史の宣告は如何、夫れ宗教はそが人類をして向上發達せしめたるものあらばそはそが有する眞理の然らしむる所にして若し此點に於て失敗に終らんかそはそが欠點の然らしむる所なりとなさゞる可からず去れば人類は各自の宗教が發生し又維持したる文明の程度如何によりてそが優劣高下を

判知す、

佛教が生じたる實際上の結果は其靈的性質其道德的教訓および其祖師の高尚なる性格よりして期待せらるべき所のものとは異なれり勿論佛教は一時非常の成効を奏したり釋迦在世の頃にありてはそは靜かに一小國より他の一小國に傳はれり其死後にありては僧侶の內訌國々の爭亂によりて其進歩を妨げられたりと雖キャンドラガプタおよび其孫アソカ(紀元前三百二十年――二百五十年)が印度全國を統一するに至りて佛教は茲に進歩の一大機會を得たり、按ずるにキャンドラガプタおよびアソカはスードラ階級の出なりしが故に自然階級的區別を輕視する宗教に好意を表したり此アソカ王は「神々の愛人」と呼ばれたる人にして新信仰の傳播には極めて熱心なる人なりき去れば彼は此理由と王としては稀有なる善德を有せしとによりて今日に至るまで佛教徒の在る所安くにも彼の尊崇せられざる所あるなし、彼は當時の人々にとりては實に全世界の王者なりき蓋し當時の印度人には印度は「全世界」にして孔子に對して支那および路加に對して羅馬帝國が全世界なりしに異ならず、アソカの高尚なる性格併びに其勝利其敬虔其傳

道的熱心は彼をして著明なる人物たるに相當はしきものたらしめたり、コーペン曰く「若しも人の名譽にして其記憶を尊敬する人々の數によりて又は曾て尊敬を表したる亦今尊敬を表しつゝある唇の數によりて決定せらるべしとせばアソカ王はシャーレマンよりもシーザーよりも優りて名譽あるものなり」と彼(アソカ王)は印度の所々に然かも廣遠なる距離に幾多の石柱を建立し其王國の廣袤を示したり彼は是等の石柱および岩石に銘記するに「地上の平和、人々に對する善意」の純潔なる精神を言出するの詔勅を以てしたり、彼が命じたる事柄の中には最初の病院とも稱すべきものを設立し人獸を療養すべきの命令を與へたる事あるを見る特に佛教徒として更に目出らしき事は彼が五年毎に國民一般の謙讓と懺悔とを命じたる事なりとす彼の宗教は「人類の世界的宗教の一部として猶太人にも基督教徒にも回教徒にも齊とし」く適合し得る所のものなりしなりアソカ王よりして三百年の後に於てカシミルの印度シシアン王たるカニシカはアソカ王が南方に於けると等としきものを其北方になしたり、則ちカニシカ王の下にありて佛教は大宣教的復興の時代に入來りぬ去れば佛教はそが數世紀間にありては印度およ

び東北亞細亞に前代未聞の恩惠を與へたり「こは教育文化を輸入し文學技藝を奬勵し、或點迄物質的、道德的、智識的、進歩を促進し人々の間に平和善意、友情を宣言し、國民と國民との間に於ける戰爭を非認し、社會的自由に同情を表し婦人に多大の獨立を恢復し思想言語および行爲の純潔を說き苦行なきの克己を敎へ寛大、慈悲、恕容、愛、獻身および下等動物に對してすらも仁惠を懇說し生命の尊重すべきと一切の生物に對する仁慈とを唱へ貪婪と金錢の貯積を禁じたり而して亦そが人間將來の禍福は其現在の行爲狀態により定まるてふ宣言によりて一時は人をして活動せしめ諸般の善事を作興し人類の品位を高むるの善効蹟ありしなり」然りこは之れ佛教徒が公平なりと思惟する一學者によりて枚擧せられたる佛教善行の目次なり然かも吾人は佛教の効跡を窺ふの時すらも猶佛教失敗の痕跡が更に根本的にして恒久なるものたるを疑はず今夫れ佛教は文明の程度劣等なる國々に行はるゝのみフワルガソン曰く「アリアン人種は其純粹なる血統を存する限り佛教に依賴し若くは永く佛教の教義を受け容る可からざるは之れを斷言するに憚からざる所なり」と願ふに此斷言は亦之れをセミチック人種にも適用する事を得べし一般を以て之れを言へば佛教はそを生活の律法として採用したる人種若くは國民をして斷へず向上進歩せしめざりしは掩ふ可からざるの事實なり然り佛教は人をして一般進歩の道に進ましむるの刺激を與へざりき從つて歷史的の大運動とは何等の關係を有せず科學的穿鑿に對しては好意を表する事なく大文學大美術てふものも生起する事なく亦人の靈魂を廣濶ならしむる程の事もなかりき否之れに反して佛教信奉の國民は其性質に於て唯物的非進歩的なり就れの宗教にありても佛教の僧侶ほどに無學なるはなく其禮拜の器械的なるはなく亦偶像教的なるはなし、勿論そが始めに期待せし所のものは善美なるものなりしならん然かも其幾世紀に亘れる結果の然かく不良なるに終りしは必ずや其根底に誤謬の潛在するものあるに依らずんばあらず果して然らば佛教の誤謬は如何吾人を以て見れば佛教の重なる欠陷は其無神說と之れに附隨する不完全なる人間觀に存す、吾人は順次之れを考察せん、

(一)佛教は一面に於て殆んど完全なる有神說として記述せられざるに非ずと雖そが實際無神說若くは不可思議說たるは否む能はざる所なり今夫佛陀は宇宙に遍

滿する光明若くは智慧を代表するものなり而して智慧の最高なる者は則ち完全なる人間なるが故にそが禮拜の唯一の對象は榮光の佛陀の記臆か若くは其後佛陀として地球上に生れたる人々の形像なりとす西藏および蒙古にありてはラマ即ち僧侶が相識して佛陀の靈魂が住すと思はれ從つて完全なる智慧の代表者なりと見做さるゝ一人を撰びて以て禮拜の對象となすこは即ちラマ教即ち西藏佛教と稱するものにして此佛教に徒へば大ラマ僧は死する者に非ず則ち彼が世を去るや更に他の形体をとりて生れ來るものなり去れば一般ラマ僧は大ラマ僧の死後直ちに大ラマ僧の復生は誰ぞや安くに之れを探索すべきかに腐心す彼等は大ラマ僧の靈魂が其肉体を離るゝや佛陀の靈魂が入り來れりと思はるゝ一兒を撰拔し特別の注意もて寺院に之を養育し凡ての肉情汚穢より之を遠くるにつとむ彼等は之れに教ゆるに自ら神室なりと自重し人類の禮拜を受くべき者なりと自重すべきを以てす然れども之れを定むるは實際困難にして大ラマ僧の死時に西藏に生れたる嬰兒の孰れが其再生なるべきかを判定するの難事を感ずるが故に現今にては支那政府若くはラッサの市民に認容せらるべき三兒を候補者に選ぶ事となれり加之現時にありては有らゆる權力は大ラマの手より奪はれ去りぬ

モニエルウイリアム曰く大ラマの位地に撰出せらるゝ嬰兒の多くは蚤死するか若くは物心つく前に死せしめらる而して撰擧せられたるラマ長は攝政者若くは行政者として一切の事件を處理す然かも化身せる佛陀(大ラマ)は高尚なる冥想に耽けりて人々の禮拜を受くるに專一なりと思はるゝに過ぎず」と、

熱心なる幾百萬の佛教徒は幾千年間そが禮拜の對像として神に代用すべきものを崇拜し來りぬ而して此崇拜物たるや佛國革命者が一時創始したる「道理の女神」に如かざるものにして或は人或は獸或は木等純然たる空想に出てたる種々の對象を以てし之に與ふるに神佛の名を以てす事實已に此の如し此事實は正しく神を無視する宗教の立ち難きを解明するものに外ならず願ふにかゝる有神教に比すれば敬虔なる不可思議說は寧ろ多しとするに足るものありと云はざる可らず釋迦をしてかのラマ教を見せしめば彼はその諸佛を目して其承認せざりし波羅門教の哲學的神よりも更に幼稚にして亦偶像的なるものと見做すべきや疑なし今夫れ釋迦は何故に神の存在を承認せざりしや蓋し其存在が證驗に不可能なり

と言ふよりも彼がかゝる抽象的非人格の靈を存在すべしと思惟せざりしが故のみ、かの波羅門教の主張するが如く存在すべきものを有せざる存在領會すべきものを有せざる智慧、對象を有せざる意識、樂むべきものを有せざる樂、は空にして存在するものに非ずと思はれたるが故に釋迦は唯かくの如き心靈は存在するものに非ずと結論したるのみ然れども波羅門僧が彼に迫りて世界と人間の起源を說明せん事を以てしたるに彼は此議論を避けて唯宣言して曰へり「予は唯た世界の多くの害惡を他人と共に分有する者にして之れが療醫者を探索する者なり」と彼が承認したる唯一の造物主は「行爲力」即ち「業報の不可思議」なりとす則ち之れに從へば如何なる行爲も空滅するものに非ずして永久不斷に因果てふ圓環を回轉するものなり去れば車輪は此教義を代表するの好表號にして業報の輪轉極りなきを表示するものなり、

サー、モニエル、ウイリアムは佛教の無神教たるに說き及びて曰く「佛教は全く宗教と稱す可からず何となれば神なきものを宗教と稱するの要なければなり」と然れども言語の爭は要なし事實は實際そが宗教たるを明示するを如何にせん然りア

ソカ王の如き人は正しく宗教的人物なりしなり、彼が岩石面の銘文の一に曰く「宗教の賜に比すべき何等の賜もあるなし」と實に佛教は其純粹なる形に於ても其多くの不純迷信の形に於ても幾百千萬の宗教にてありき、而かも佛陀自身は直ちに最上至高者として禮拜せらるゝに至りぬチバルに於てはアヂ佛陀と稱せらるゝ一最上佛陀を禮拜す、佛教曆にはボヂサトワス即ち自己遍照の智力より得たる智識を有する人々もて充滿し民衆は將來に於て再來すべき佛陀として是等を禮拜す此ボヂサトワスは天使として天上に生存する者にして彼等の善行は幾多の輪廻によりて斷へず善德に進み佛陀の境界に進向し必要に應じて地球上に出現する者なりと思惟せらる去れば普通の佛教者は己に全く涅槃の中に消滅し去れる釋迦よりも此のボヂサトワスに禮拜の熱情を傾注するを見る南方佛教の寺院にありてはメイトレア(親切の佛陀)の像は白衣を着して釋迦と相併んで安置せられ地方の寺院にありてはマンヂアスリ(智慧を人格化したる者)アワロキニスワラ(主宰的仁愛を人格化したる者)アミタバ(無限の光明)の諸像は特別なる位地に安置せらるゝなりかくの如く佛教がその無神說を廢棄するに至りしは會々以て人心が

佛教の成効と失敗

神なくして存在し能はざるを表證するものに外ならず佛教はかく佛教本來の精神に相違せる種々の神學上の發達をなし民衆の思想を釋迦自身の高尚純粹なる道德より離れ去らしめ代ゆるに荒唐無稽なる空理を以てしたり、

諸佛教國にありては人民の性質は頑固無情にして曾て佛教の特色たりし高尚なる道德は人民を治むるの力を失ひそが禮拜は不可思議說と中世の神學に比して更に荒唐無稽なる神學說と曾て世界に比類なき大虛禮とが相混じたる不思議なる光景を呈するものなり大虛禮とは何ぞや之れ蓋し佛教は器具によりて祈禱するの方法を案出したる唯一の宗教なればなりカーライルの言を以て之れを言へば「回轉する瓢簞組織」にして其主義とする所のものは「無用の反覆」によりて精神的價値を得んと欲するにあり、而してそが極めて屢反覆せらるゝ形式語は六單語より成るものなり則ち唵摩呢八爾呼詳く言へば南無阿彌陀佛にして其意義と起源とは如何なるにもせよ此祈禱程に價値ありと思はれ亦之ほどに反覆唱念せらるゝものあるなし、

實に此六語は諸佛教國にありては斷へず唱へらるゝ念佛にして或は口もて唱へ

或は之を圓筒の周圍に書きつけて有らゆる器械的方法によりて之れを回轉す或は柄もて回轉し水にて回轉せしめ風をして之をなさしめ以て効德を積まんと欲す而して其回轉彌々多くして彌々効德の大なるものあるを信ずるなり去れば若しも歐羅巴若くば亞米利加商人にして此等の諸國に自動機を輸入せんか彼等は莫大の利益を儲け得る事ならんと思はる何となれば電氣にして之れを經濟的に使用し得んか念佛車は紙片に印刷せられたる幾百萬倍の念佛を貼付せられて最も經濟的に斷へず之れを回轉し得るが故に人々の之れに依賴すべきは必然の事なればなり、

(二) 釋迦の不完全なる人間觀

(イ)釋迦が罪惡の意識を有せざりしは明らかなり彼が熱望して止まざりし所のものは罪惡よりの救に非ずして不幸の中より救ひ出されん事なりき彼は其父にして老、病、死、および輪廻よりして彼を救ふの保證を與へたらんには家庭に留まるべしと言ひぬ然れども人間の最大不幸は貧、苦、病、死に非ずして罪惡の重荷には非らざるか釋迦の溫厚なる性質――一切の苦痛を嫌惡したる性質――にとりて

は波羅門教徒が神に捧ぐる犧牲は單に嫌惡すべきものに過ぎざりしなり但し之れ彼がかくの如き祭祀を起すに至らしめたる深き精神上の必要を覺知せざりしに座するのみ彼は亦祈禱と贖罪の思想を否定したり彼にとりては罪惡は宇宙的のものにして個人的のものに非ず物質世界に固有せる所のものにして暫時の存在者には離る可からざるものなり若しも人として罪を犯さんかそが罪に附着せる刑罰は必然に出で來らざる可からず而して毫も免除ある事なし佛教は罪と赦罪とに關して此の如きの見地を有するが故に或學者は道德に關しては佛教は基督教に優越すと宣言す彼等は「基督教の赦罪の教義は原因結果てふ必然の連鎖の智識より其相當はしき勢力を半ば褫奪し去るものなり」と宣言す彼等は以爲らく赦罪の教義なくんば人々は更に思慮深く更に仁慈なるべく惡行の結果の避く可からざるを知るべく人類は更に一層幸福なるべけんと然れども事實は大に然らず之れを實際に徵すれば幾多の試驗はかゝる因果說が有害なる結果に終るを證するの實例に乏しからず而かも理論上より之れを言へば愛、贖罪、および悔改に關する正當なる思念はかゝる議論に對して明確なる反論を提供す特に愛てふ事の

中には不可犯の正義および純潔を含有するを見れば兩者の高下優劣自ら明かなるべしと思はる顧ふにかの根本的なる悔改なしに罪惡の結果を免かれ得べしと敎ゆるの基督教は之れ顚倒せる基督教に外ならず蓋し基督に於ける神の愛は吾人をして罪惡を嫌惡せしむるものなり、かの最高なる道德が常に十字架を相待ちて發見せらるゝは此理に出づるものなり、詩篇の一詩人は歌ふて曰へらく「されどなんぢに敎あれば人におそれかしこまれ給ふべし」と實に十字架は吾人に此おそれを皷吹し吾人をして吾人を愛し其躬を與へ給へる彼(基督)を熱愛せしむるものなり要するに罪惡を知らざる宗教は人類の傷を探知せざるものなり去ればそが人間の要する療醫を與へ人間の性質を高上する能はず從て人類の永久的宗教たる能はざるは固より其所なりと言はざる可からず、

(ロ)佛教が人間に提出する終局の目的は純粹に利己主義のものなり、佛教の熱心なる一辯護者は曰く「恐らくは世界に提供せられたる道德的宗教にして佛教よりも純粹に非利己主義なるものなし佛教は如何なる善果も――聖人たるの個人的存在すらも――之れを保持するに足らずと敎ゆ實に佛教の敎ゆる所は純粹な

る放棄則ち自己に關する一切の事物を放擲する事なり」と然り然れども吾人は佛教の自己てふ概念の不充分なるを記憶せざる可からず釋迦は靈魂の存在を拒絶したり而して個人的存在の消滅をばブラマと合一する事なりとなしぬ彼が無靈魂說は其無神說の立場より出るものにして萬事萬物に對して唯物的見解を懷けるに起因す、彼に從へば純粹なる靈的存在てふものは實際有るものに非ず故に以爲らく「人間が肉体を離れて存在する靈魂(即ち永久の自己)を有すとなすものは之れ異端者なり蓋し物質的ならざる生命てふものは在る者に非ず而かも人間唯一の救拯は存在する事にあるには非ず其大問題たる所のものは如何にして自殺を行ふべきかにあり自殺とは特殊の形体よりして人の生命を脫離せしむるかの憫むべき迷謬の自殺に非ずして有らゆる種類の存在よりして彼を脫却せしむるものを云ふ(マルカス・ドッド)と佛教の大目的にしてかくの如くんばそは洵に非利己主義に非ずして極めて利己的なるものと言はざるを得ず、ライスダビッドは宣言して言へり佛者が涅槃を追求するは人類全体と自己とに對する崇高なる動機よりなすものなり彼は自己の業(カルマ)を破壞せば何等の不幸をも世に遺す事なくして自己の存

在を滅却し去るべきを知る彼はかくして寂滅の彼岸に速進すと洵に然り然れどもかくの如くんば卓越したる人のみが寂滅消失して多數人民は救ふ可からざる不幸の中に沈淪し去らざる可からず要するに佛者の大目的は個人的苦痛より救ひ出さるゝにあり、彼は其劣等なる自己に死す然かも之れ眞我に生きんが爲めには非ず基督とともに復活し來らんが爲には非ず唯だ無一物中に滅亡し去らんが爲めのみ、彼が現世に於る生命を嫌惡するはイエスが建設せる公正崇高なる法則に從ひて永生に達せんが爲めに非ず唯だ彼が何等の生命をも有せざらんが爲めのみ、

去れば釋迦自身の弟子等が其師に示されたる目的に達するよりも寧ろ菩薩てふ卑しき位置に達するの更に願はしきに如かざるを感ずるに至りしは敢て怪むに足らず此故に大乘の諸師は其弟子に勸むるに寂滅の狀態にあらんよりも寧ろ菩薩たらん事を以てしたりライスダビッドは言へらく此くの如くにして「彼等は佛教の中心點を離れ其理想の方向を變ずるに至りぬ」と然り然かも之れ己む可からざる變移には非ざりしか實に善良なる人をして寂滅は天上の生命――――遂には

佛陀となりて世界を救ふべき天上の生命――に比して更に高尚なるものなりと信ぜしめんとするは不可能の事には非ざるか去れば佛教の中心點と其倫理の企圖する所とは共に矛盾せりと云はざる可からず而して佛教者の大多數は釋迦の教よりも自己の倫理性に從ひて其理想を變換するに至りぬ而かも彼等が其中心點より離れ出るや教義上の空想粗惡なる偶像禮拜の藪中に迷入し釋迦が示したる高尚なる理想的生活は茲に消失せらるゝに至れり、

佛教が其目的に於て利己主義たる此根本的欠點は亦其無神説より胚胎し來りぬ、佛教に從へば人間は最高なる者にして人間以上の存在者ある事なく其向上發達は自己一個の効德に依るものにして自己一個の爲めのみ、人は受造物に非ず況んや罪人をや彼は運命に苦む犧牲者なり此故に彼の全心全力は此運命の悲慘を脱却するに用ひざる可からずとなす勿論佛教は親切、忍耐、寛恕の德を敎ゆ然かも之れ神――其靈によりて人の理性と良心に語り給ふ神――を愛するに依るに非ず、神の子供にして兄弟たる人類を愛するに依るに非ず唯人生不幸の本源なりとして滅却せんとしたる慾望が不親切、短氣、狹量と相結合したりと思はれたるが

爲のみ見よ釋迦が其入悟の時喜び極て言出したる言と彼が最後の言辭とは彼が輪轉再生を脱却するを以て祝すべき大目的なりとなせるを明示するものあるに非ずや而して彼は此の祝すべき大目的に達するの「道」を其弟子等に敎へしなり、こは實に佛敎の利己主義の見にして自己一個の安逸を追求するものゝみ然り佛敎が自己を殺さゞる可からずと敎ゆるの時すらも吾人をしてマックスミューラーの言を領會しむるに足るものありとす曰く「世界の宗敎にして佛敎よりも我基督敎を絶へず連想せしむる宗敎ある事なし而かも猶ほ佛敎程に人をして眞理に遠さからしむる宗敎ある事なし佛敎と基督敎とは宗敎の最も精髓に關しては實に兩極端なり、――佛敎は人間以上の權能に依據するの感情を無視し從て神の存在を非定するものなり基督敎は父なる神、神の子たる人の子を信じ神の獨子の信仰によりて吾人々類を神の子たらしむるものなり」と、

佛敎の人間觀が不完全なるはそが獨身生活を最上の狀態なりとなし托鉢を生活の最上理想となすによりて最も明白に表白せらるこは實に其不完全を充分に證責暴露するものと云はざる可からず何となればこはパウロが据へ常識が是認す

る「働かざる者は食ふ可からず」てふ法則に反して佛者は唯だ他人より乞ひ得たる所のものを食はざる可からずと敎ゆるものなればなり而して父子夫婦の關係は無視せられ獨身生活と懶怠とは賞揚せらるかくの如きは人間の存在をもて誤謬呪詛に過ぎずと信ずるより來る當然の結果に外ならず吾人はミルすらも之れを避く可からざる結果なりと記載したるを怪むを要せず曰く「佛敎が大勢力を有する國々にありては男子の三分の一以上はラマ即ち僧侶(獨身僧)と成る」而して「杖および托鉢を持して食を乞ふの僧侶は勞働的人類中にありては決して高尚なる事に非ず」と然り佛敎が有するが如き社會觀にては如何でか價値ある文明を有する事を得んや厭世敎は地球上に於ける「神の市」てふ思想を毫末も有せず其理想は生命なきの世界に外ならず、

果して然らば佛敎失敗の大原因はそが神を顯現せざるにあり不可思議說は常に實際上無神說と其結果を同ふす而して無神說は人心の驚愕する所なり吾人は釋迦自身と其國と其時代とにありて且つ其敎義の短所長所によりて彼が成効を說明するに足るものを有す廣く之れを言へば波羅門敎は倫理なきの宗敎を提供し

釋迦は宗敎なきの倫理を提供したり而して彼の敎は二者中にありて比較的に道理あるものとして一時民衆の歡迎する所とはなりぬ然かも此二者がともに衰頽するに至てや佛敎はより大なる衰頽を來たしぬ而かも其衰頽は其根底に神を有せざるの倫理は永存する事能はざるを證明するものなり、

佛敎と基督敎との親和點は何ぞや聖書は人は神に象りて造られたるを宣言す而してイスラエル人の約束は神が一個の人間によりて其完全なる聖像を現はし給ふべし此一人によりて神は死と罪惡とを亡ぼし給ふべしと云ふ事なりとす而して時の滿つるに及びて此約束は成就せられぬ昇天せる基督は人々をして神の子たらしめんが爲めに彼等に聖靈を與へ給ふ此聖靈に從ふは吾人の全心全力を擧げて其正當なる王に服從するの謂にして決して外部の權力に屈從するの謂には非ず人間存在の奥深き所に於ては神の仁惠と吾人の自由とは同一物にして二物に非ず去れば佛敎の特質たる人間の精神と全人類の平等とに對する深き尊敬の念とは基督敎にありて然かく充分なる保證を有すモーリス曰く「佛者の心に於ける此主要なる確信より生ずる附隨の觀念は一として福音書に之れが類似の觀念

を發見せざるなし」と要するに釋迦は純粹なる人間なりき彼は一切を棄てゝ眞理を發見宣傳したるが爲めに民衆の讃稱と愛敬とを博し得たりと雖自ら人間以上の者なりとは宣言せざりき兎も角も彼は尊敬すべき人にして其生活と行爲とは吾人の稱讃に値するものあり吾人は佛教徒をして釋迦の生活と教訓とに從はしむるを要すかゝの如くにして彼等は釋迦に發見せらるゝ光明よりして「世界の光」に導かれ來るを得べし、禮拜せらるゝを欲せざりし佛陀よりして吾人の禮拜を要求したる救主に迦吡羅蘇都の預言者よりして「神の子」――――總ての預言者が證言したる神の子――――に到達するを得べし、

第九章　イスラエル

イエスキリストの宗教は崇高なる宇宙の秩序と人間の歷史とに存する神の默示を包含する者なりと雖然かもそが其重なる根據とする所のものはイスラエル人の特別天啓――――則ち總ての宗教の眞價を判定するものたる特別天啓――――なりとす、イエスは斷乎として舊約聖書の上に自教の根底を据へぬ彼は夫れ自ら最

上の天啓にましませども新らしき神學は之れを主唱せざりしなり、彼は亦自らイスラエル人が其族長時代よりして待ち望める理想の實現たり從つて彼は自己の使命を呼ぶに福音の名を以てし若しくは全人類に對する喜の音の稱呼を以てす、此故にイエスの宗教を知らんが爲めには須らく聖書を研究せざる可からず吾人は聖書研究の必要を言ふこは回教儒教佛教の精髓が其教祖の生涯を研究して知り得らるゝに反して基督教は然らざるの意なるか、而してこは亦印度教の如くに幾千年に亘れる種々の文學を研究せざる可からざるの意なるか此問に對して單純なる然否の答を與ふるは誤謬を招くの恐なきに非ず今夫れ「キリストはキリスト教」なりとの事は他宗教の開祖が其宗教に對して然か言ひ得るよりも一層確實に斷言するを得べし然かも同時にキリスト――――イスラエル宗教の成就にしてそが預定せられたる花たるキリスト――――は律法、預言者および詩篇中に預想せられたる者にして其種族の前代歷史と文學とに親密なる關係を有する事他宗教の開祖が其人種的歷史および文學に有する關係の比に非ず想ふに舊約の天啓がイエスに對してかゝる親密なる關係を有し得るはイスラエル人の生涯が世界無

比なるものなりしによる實にイスラエル人の歴史――イスラエル人の生活を反照する歴史――は宛然として一個人の傳記を見るが如し之れ他人種に其比を見る能はざるものなり、「如何なる人種も之れ程迄に個人の如き一致に近ける人種あるなし――彼等を外にしては如何なる人種も人類の耳に一音聲の印象を明白に傳へたる人種なし」而して此一音聲は幾世紀を通じて「神の外に神なしイスラエルは其預言者なり」てふ一樂聲を言出したり、

パウロは此眞理を領解したり從てイスラエル人に對するイエスの重要なる關係を領會したり彼が議論の形式はラビ的なりと雖そが議論の中心に眞理の存するは疑ふ可らざる所にして亦彼が單純なるラビにては見る能はざりし深遠なる靈的眞理を洞見したるは等しく明白なりと言はざる可からず」果して然らばキリスト教の歴史は一生命の物語として語るを得べし而してそが一貫したる生活歴史の各章句は分れて舊新聖書に記載せらるゝなりその幼時たる古代にありては此生命の形狀は個人的宗教に必要なる苗床および發芽力たるに相當はしきものなりき、太古よりして漸次に發達し來れる(イ)種族(ロ)國民(ハ)宗教治下の國民てふ段階

は宗教の單位にして亦宗教進歩の要件なりき時の滿つるに及びて此生命は人――「有らゆる時代に適合する人」――として現はれ來りぬ此人格の生涯と死とにより、て神は充分に顯現せられ給ひ神と人との個人的關係は茲に確立せられたり、爾來福音の傳はる所個人はそが個人的宗教の勢力と威嚴とを充分に自覺しつゝ若し必要あらば家族、國民、世界を對手として爭ふを躊躇せざるに至りぬ實に神人の意識を離る可からざる有樣に有せしイエスは其精神によりて千九百年の間世界の生命なりき而かも今後と雖彼の宗教を不用ならしむる他の宗教は起り來り得べからず、

基督教の歴史を知らんが爲めには聖書中の何書より始むべきか若しも吾人にして律法として知られたる五書よりせんか吾人は議論の渦中に沒せらるゝを如何せん、何となれば五書は種々の異なれる文書を巧みにつき合はしたるものにしてそが年代も著者もともに不明なればなり、五書の次に來る歴史の書も五書と同しく議論の存する所なるを如何せん然れども舊約書中傳記として承認せらるゝ幾多の記錄あり、こは廣濶なる範圍に於て過去の歴史と根本的なる宗教觀念と紀元

前第八世紀に於けるイスラエル人の實際生活を吾人に顯示するものなり、此時代にありてアモス、ホゼア、イザヤ、ミカ、および多分其他の預言者輩も其教――――單に之れを見るも驚くべき教にして比較的に之れを見そが人類に及ぼせる影響より察すれば更に驚くべき教――――の大体を書き遺したり而して是等の書冊は爭ふべからざる歴史上の根據を提供するものにして從つてイスラエルの宗教を考察するの充分なる立場を供するものなりとす。

羅馬の建設は紀元前七百五十三年にしてオリンピアの創設は七百七十六年なりとす而して羅馬が未だ建設せられず希臘の自覺が漸やく覺醒し始たるの時に方りてイスラエルは實に其發達の頂點に達したりそが宗教の教師は歴史上にありて無二の位地を占有したりアモス、ミカは田舍に生活し、ホゼア、イザヤは都會に生活したり、然も其家庭の都鄙其階級の如何に拘らず預言者の勢力は非常なるものなりしなり、彼はイスラエル人の良心に訴へぬ、而して國民は一齊に之に答ふるに贊同若くば迫害を以てするを躊躇せざりき、かのアモスは久く南方猶太の高地及び山腹に住し南方カルメルに其羊を牧し其葡萄樹を栽培し居りぬ此時に方りて

イスラエル人はエホバに對する責任を忘れ偶像を拜し不品行を行ひ、貧婪にして貧者を壓迫して憚らざりきアモスは天來の聲を其心に聞けり此聲や群羊を獲んと欲する獅子の號聲を聞くが如くに明白に彼の心中に響き渡りぬ、彼は此使命に答へんが爲めにサマリアおよびベテルに行き其稠密なる人口の裡にありて來らんとする正義と審判とを宣べ傳へぬ然かも「地は其言に堪へざりき」、

ミカが國民に與たる印象も亦アモスのに同じ、人或は思惟せん何人もミカの如き田舍の預言者――――シオンは荒地となりて耕されエルサレムは……と宣言せる田舍預言者――――に注目する事なかるべしと而かも彼よりも偉大なる同代の預言者イザヤはエルサレムに住して神命の犯す可からざるを齊としく宣言したるに非ずやと然れども事實は之れに反してミカの言辭は深く王および人民を動かし百年後に至りても猶ほ其余響の將たるものありしを認む、ホゼアが傳道したるの時代はサマリアは已に業に審判の時期に迫りぬ然ども、ホゼアの要求に對する人民の答へは「背教」てふ行爲なりき、イザヤは四十年の間ユダの強大なる砲臺なりき、或はヂエヒユの孫がエリシヤを稱呼したるが如くイスラエルの軍車、亦其騎兵

なりき預言者をして此大勢力を有せしむる者は何ぞや、

(第一)預言者輩は新らしき神命を人民に齎らせしには非ずして國民の歴史に存する大事實の上に其立場を有し國民の最深最奥なる確信に訴へたり、彼等はイスラエル人がエホバに對して特殊の關係を有するの證據として族長等の物語、ベテルに於けるヤコブ、ペニエルにて天使と角力せし事、其祖先が摩西、――イスラエル人を守護したる預言者――アロン、ミリアム、の手によりて埃及より救ひ出されし事、エホバが四十年間荒野にて彼等を守り給へる事、エホバガアンモン人――高き事杉の如く強き事樫木の如きアンモン人――を打ち亡ぼし給へる事を引用したり而して彼等は亦神が彼等の子孫の中より預言者を起し其若者の中よりナザレ人を出だしかくて亦預言者と種々の異象とにより彼等を敎へ導き給へる事恰かも父が其嬰兒の危き歩みを導くの恐耐仁愛に等しかりし事實に訴へて說く所ありしなり、アモスはかゝる預言者の敎が必ずや國民の贊同を得べしと信じたるを表證すべき口調に於て絶叫して謂へり「かくの如きは之れ實に事實に非ざりしが、イスラエルの家よ」と、

預言者を以て改革者にして新しき神の觀念を提供したる者なりと思惟するは近世の想像に過ぎず當時にありては預言者の使命を好まざりし人々すらも決して然か想像せざりしなり見よかのベテルの聖所に於けるヂエロボアム第二世の祭司はアモスの敎にかゝる反對を試みざりしに非ずや、彼が反對せしは唯アモスの敎が人民に及ぼす影響如何を恐れしが故のみ、彼は幾多の王朝は預言者の敎へによりて覆滅せられし事あるを熟知したるを以て其職務に忠なるの點よりアモスをベテルより逐放しユダの山地に彼を追遣らんと苦心したるのみ、ホセアの使命の要旨はイスラエルの國民は猶ほ「わが神よわれらイスラエルはなんぢを知れり」と叫ぶにも拘らずエホバの契約を遵守せざるの致す所として審判は今や目前にせまれりと云ふ事なりき、エホバは實にイスラエルの歴史の始めよりして彼等を愛したり曰く「在昔われイスラエルを見る事荒野の葡萄の如く汝らの先祖等を見ること無花果樹の始にむすべる最先の果の如くなりき」と然かも彼等が「身を恥辱にゆだねし」たる事士師時代に於けるバアルーペオル、ギビアの時の如くなりしなり、彼等は其結果として靈の事には無感覺となりぬ預言者輩すらも世俗に俗化して

民は眞正の預言なるものを認知する事能はすなりぬ、此故にホゼアは宣言して曰へり「かれら聽從はざるによりて我が神これを棄てたまふべし、かれらは列國民のうちに流離人とならん」と但しかゝる宣告の中にも彼は猶ほ悔改むべき事を勸め希望の猶ほ存する事を敎へぬ何となればエホバは神にして人に非ざるが故に彼は全く其民を捨て給ふ事なかるべしと說きぬこは則ち後世エレミアがユダに悔改を勸めたると其揆を一にす、

イザヤの時代にありては反對黨はイザヤに反抗してそしるに彼が凡庸なる敎を敎ゆるに過ぎざるを以てし彼が屢同一事を繰返して人々を嬰兒視し兒童視するの僻あるを嘲笑したりミカの敎に對する批評家の論難も亦之れに類す曰く「預言する勿れ彼らは預言す彼らは是等の者等にむかひて預言せじ恥辱彼らを離れざるべし」と、

(第二)彼等の預言はおのが心より出づるに非ずしてエホバの口より出でたるものなり、「彼等はエホバの議會に立てり」、彼等は忠實にエホバの言を語りぬ而して「エホバの言は火のごとく又磐を打碎く槌の如く」なりき、彼等は其聽者に思索若くは智

力的刺激若くは思想上の問題に對する解答を與へずして直ちに人々の意志に訴へ其生格と生活とに對して嚴然たる要求をなしぬ、彼等は時としては拙劣なる政治家(若し時の便宜を標準とせば)たるに過ぎず其將來に關する豫想も時人に領會せられざる事かの僞預言者および卜者の輩と撰ふ所なかりき、然れども彼等は常に其特質たる不滅の樂天觀を保持し永久の眞理を確言し萬代に亘りて正善なる道義を敎へて倦む所なかりしなり、

預言者は皆モーセが建設せる基礎の上に立てりと雖然かも其特色とする所のものは彼等が「時の休徵」を觀取し時代に順應する使命を有したる事なりとす、彼等が其使命を發表するや彼等は自己の言說が前代の預言者若くは當代の他預言者の敎に矛盾するや否やを聊かも顧慮する所なかりき彼等の眼中にはエホバの外主たるものなく唯エホバにのみ服從奉事したり彼等はエホバが心の淸者およびエホバの聖旨をわが意志となし其性格を慕ひまつる人々には彰々として自己を現顯し給ふべしと信じぬ彼等は深く其エホバと個人的關係の神聖なるを信ぜしが故に常に獨自一個の特質を保存し他の預言者の眞實なる思想すらも之れを借り

來りてエホバの言なりと謂ふを竊盜罪の如くに感じたり、かく「預言者輩は不變なる正教の標準(例せば信仰個條の如きもの)を認識せず唯其心に授けられたる現在の光明に忠實に服從すべしてふ一事を遵守したり」と雖然かも彼等はエホバは眞實なるものなり彼は終始一貫して昨日も今日も何時迄も變り給ふ事なきを知りぬ彼等は亦イスラエル人の經歷に通しそが如何なる來歷を有し來りしかを諸所に略記したり彼等に從へば契約を結べる神とイスラエル人との關係は恰かも二人の人間間に結ばれたる契約の關係に異ならずアモスに從へば此關係は君主が其殊寵の臣民に對する如し其審判は殊寵を受けたる度に比例して重かるべしホセアに從へばこは父と子との關係夫と妻との關係に同じ一方は常に眞實、仁愛にして他方は虛僞不眞なりしなり「イスラエルの幼かりしとき我これを愛しぬ我わが子をエヂプトより呼いだしたり」而して此幼兒は罪を犯す事七度を七十倍するの甚しきに至れどもエホバは猶ほかく呼び給ひたり曰く「エフライムよ我いかで汝をすべんや……わが心わが衷にかはりて我の愛憐こと〳〵く燃おこれり」と」、イスラエル人が一個人として活ける神と契約し此活ける神が幾世紀間イスラエル人を教育し彼等をして世界救拯の事業に相當はしき民たらしめかくて地球上に神國を建設せんとなし給てふ預言者の思想は世界の歷史によりてそが誤謬なきを證明せられたり預言者はイスラエル人と神との關係をかく間斷なきものとして思想したるが故にイスラエル人の過去の歷史は其何事たるを問ず皆此關係によりて出で來れるものにして將來の禍福をト知するに足るものと思惟したり、彼等の預言なるものは個々別々の出來事を預言するものに非ずしてイスラエル人が神に對する態度如何によりて起り來るべき當然の結果を預告するものなり此故に彼等の預言は廣き道德上の意義を有するものなり實に眞乎の預言者は極めて正確に現在を知悉し而して此現在より生じ來るべき必然の歸結を知了し居りしなり、彼等は心洵に塵俗の外に超然として見神の境に逍遙したるが故に時間空間の差別を脫却し千年も一日の如く一日も千年の如くなる神の目もて萬事を觀察したり而して各預言者の預言は其材量たる歷史即ち攝理の異同によりて異同し各自の性格想像經驗の相違によりて相違す但し其觀念たるや之れ神の與へ給へる所のものに外ならず神は全過去を通じて人民を教育し自己の思想と意志

とを知らしめんとし給へり然れどもイスラエル人は神の教を受くるに適せざる程に物質的思念に滿たされぬ彼等は神が與へ給ふ使命を全ふせんが爲めには更に異れる種類の教育を要したり而して此教育も亦――第八世紀前の預言者輩に從へば――怖ろしき方法によりて與へられしなり然り而して此預言者輩が將來に對する預想は大同小異にして其一致する所は曰くエホバの宗教の眞相を發揮せんが爲めに審判は來るべし國民の滅亡に近き刑罰はエフレームの上に落ち來るべしユダは大に鞭撻せらるべしと云ふ事なりき、想ふにかゝる刑罰は他國民の場合にありては同時に其宗教の滅亡を免かる可からざるものなれども然かもイスラエルの場合にありては然らず則ちイスラエルにありてはかゝる刑罰はエリア、エリシア、ヨナおよび其他の預言者の態度に一大進歩を劃したり而して彼等はバール禮拜――オムリが輸入せし所にして疑もなく政治上の理由を有せしにも拘らず――に反對せる時すらもエホバに從ふは國民の幸福なりと思惟したり、此故に彼等は國民をしてエホバに忠眞ならしめんと欲して止まず國王の死に際しては革命を企てそか王朝を一變せんと試みたり彼等はかくの如くにし

てイスラエル人の運命を導き彼等をして其心情の渴仰するエホバに對して忠誠ならしめんと苦慮したり彼等は實に宗教的大政事家の本領を發揮せしなり然れども彼等がイスラエル人に對して有せる最大の祝福はモーセの祝福中に示されたるものに過ぎざりしなり詳しく言へば曰く勝利的國民曰くエホバにありて幸福なる國民曰く正直なる王を戴き善良なる政治の下に住み戰爭に勝ち衣食に豐かなる國民の理想に過ぎざりき而して此理想たるやソロモン以來屢失望に終りたるものにしてアシリア大帝國の出現とゝもに破碎し去られ終りぬ而してそが理想を實現せんとの企は幾度か失敗に歸し革命の望消失し去りしを示しぬ、加之人民の腐敗は其極點に達しエホバの會議に立つの人々も最早エホバの意志計畫と國民の政治的利害とを同一視し能はざる程に至りぬ夫れ國民の利害と神意との不一致てふ事は異教の預言者輩には想像の及ばざる所のものなり何となれば彼等にとりては神と國民とは全く相結合して分つ可からざる關係にあればなり勿論吾人は異教に對して不公平なる可からず願ふに「そが國民の性格に劃然として顯現し、正不正に關する國民の倫理的觀念に宗教上の允許を加へたるは事實な

イスラエル

り、然れども異教は品性の發達には何等の効なかりき、而して其神は常に人民の倫理的地平線上に立ちて超然たる特質を有せず……エホバは然らず彼は自ら眞の神なりと宣言しイスラエルの歴史を貫通して自己の意志計畫の存する所を現示し終始其禮拜者の時代觀念を超絶する道德的目的を遂行するの意志の存するを現示し給ひしなり」、

預言者はエホバの性質と意志とをかく解したるが故に彼等の預言は此確信の發露に外ならざりき、紀元前第八世紀代に方りては預言者はイスラエル人を救はんが爲めに預言せしに非ずして其罪の宣告をなさんが爲めに預言したり然れど此刑罰たるや他國民の場合に於けるが如くイスラエル國民の滅亡には非ざりき然り「エホバは最も遠しと思はるゝ時イスラエル人に最も近く在まし給ひたり」去れば預言者はイスラエル人をして物質的繁榮とそが不朽の榮譽とを混合せしめざらんと欲したり、彼等はヂエロボアムの日に於る赫々たる成効および外部の繁榮に眩惑せらるゝ事なくイスラエル人の正にエホバに盡すべきの本務を預言して怠る事なかりき彼等は預言すらく「エホバは憐憫を好みて祭を好まず」然かもイス

ラエル人が憐憫を施さゞるの結果として神の懲罰は當然來るべくイスラエルの罪人は皆亡ぼされざれば已まざるべしとホゼア謂らくエホバは聖にして嫉妬の愛を有し給ふが故に姦淫的人民に對して配偶者たる特權を與へ給ふ事能はず去ればイスラエル人は悔改して道德上の甦生をなさゞる可からずかくしてエホバとイスラエル人との一致は茲に恢復せらるべしと、

此時代に當りてイザヤの預言は實に最高の音調を發したり彼は昔への預言者と前代の預言者とを一身に集めたるの職分を盡したり彼は地上に於てエホバの聖意の行はれんが爲めにはイスラエル人の存在を要すと確信しエルオレムが彼の時代に於けるサマリヤと共滅亡の運命をともにせざる可きを信じて疑ふ所なかりき、彼は衆人がエルサレムの前途を思ふて愛愁措く能はざるの時此信仰により て固く立ちぬ彼は昔への預言者の如く屢々國の君主に面接し場合に應じて取るべきの政策を敎へたり、而してアハズ王は彼の言を用ひざりしと雖其子ヘゼキヤ王は屢々彼の忠言に從ひぬ、然れどもイザヤは亦一方には怖るべき審判がユダの上に降るべく而してエホバは此審判の機關としてアシリヤの兵力を用ひ給ふべ

イスラエル

しと確信したり、但しイスラエル人が何處迄も滅亡せざるべしてふ彼の信仰は確乎として巖の如くエフレームとスリヤとの同盟がダビデの家を危殆に瀕せしめたる時もアシリア人が屢侵入掠奪を恣にしたる時も紀元前七百三十二年代にサルマニザーがサマリアを亡ぼしたる時も七百十一年代にサルゴンガアシドドを占領したる時も七百〇一年代にセンナチャリブがユダの諸壘を陷れエルサレムの降服を迫りし時も彼の信仰は毫も衰ふる所なかりき實に「神我らとともに在す」てふ證言は彼が預言の始めより終り迄彼を離るゝ事なかりきイサヤ以爲らく一度イスラエル人に播れたる聖き種子は必ずや審判の裡にも其生命の力を保有するなるべしラレビン及び槲の實は秋冬の風雪を凌ぐに非ずやエルオレムはソドムが有せさりし自救力を夫自らに有すと實は國民に對するイザヤの證言は焔々として火の如きものなり曰く「エホバシオンを建設し給へり」曰く「エホバはシオンの王として座し給ふ」曰く「アリエルを攻てたゝかふもろ〳〵の國々は夢の如くならん」と而して此預言たるや全く斷乎たるものにしてエレミヤの預言がバビロンの逐放を七十年に限れると全く其趣きを同ふす、イザヤはエホバの計圖はユダの

王國に存すとなしアシリヤはユダ國を掠奪し殆ど全勝を博するの觀をなすべしと雖エホバの救は直ちに現れ來るべし而してそが救濟とともに榮光あるイスラエルの將來は始まるべしと宣言したり、而して此榮光ある將來に入るや戰爭は茲に影を收めて永久の平和は至るべくダビデの末の一子は王位に座して正義もてエルサレムを治むべし、此一子の時代にありて人々は高貴なる生活を營むべく猛獸は馴致せらるべく天地は喜びを爲さんと預言したり顧ふにイザヤが此驚くべき一子に關する預言はメシヤ的幸福時代に關するアモス、ホゼアの思想に比して遙かに一歩を進めたるものなり蓋しイザヤはエホバの民には之が支配者たる相當はしき王者なかる可からずと思惟しエホバがかゝる王者を興へ給ふべしと信じたり去れば彼は人々が全く失望落膽したる時に方りてセブロン、ナフタリの地——現在敵に攻掠せられ深き悲痛の中にある其地——に光明は出現し來るべし則ち正義もてダビデの國を恢復する一子は生るべしとなしぬ、彼は其幻像を見て喜悅に堪ず其救主を呼ぶに(普通の人間には余りに大なる)四つの名を以てしたり、曰く奇妙なる議士曰く大能の神曰く永遠の父曰く平和の君、と而してイザヤ

が將來の希望は一に掛りて此子に存しぬ去ればキリスト教徒が此一子――イスラエル國をアシリヤより救ふべき一子――によりてイエス――七百年以後にベツレヘムにマリヤより生れたるイエス――の面影を偲ぶは決して故なきに非ず、然れどもイザヤは唯初代の預言者輩がダビデに與へたる約束を一身に具備し――若し神の民の存立を必要とせば――そが時代に必要なる事業を爲し盡すべき一人の生れ來るべきを預想したるに過ぎざる事明なり、蓋しイスラエル國民は自己に相當はしき國王を有せざる可からず而して此王やイザヤにとりては理想的繪畫にしてツライバーの謂へるが如く彼が將來に屹然として秀づべしと豫想し……生ける眞の人格者として捕捉したるもの」なりきかくして「前代の預言者の比較的漠然たる約束はイザヤによりて具体的人格」に集中せられたり、而してイザヤの此預言はミカ――多年の後一預言書を書けるミカ――が等としく唱道したる預言なりき、ミカ則ち謂へらくユダは「彼女が孕めるものを產む時迄」は敵人の手に委せらるべしと、ミカも亦其胎兒の出生をばアシリヤ時代中にあるべしとなしダビデの如き救主の生るゝはベツレヘムなりと宣言したり、

メシヤの王國に關するイザヤの見解は當時に於ける國民的エホバ教の然らしむる所として國民的の性質を有しぬ――但し之れ其時代にありて豫想し得る唯一の理想的國王なりき――而して猶太國民以外の國民の改宗は此靈界の達見を有せるイザヤにすらも唯だエホバの代表者たるエルサレムの王に對する貢稅、崇敬、服從の意味に外ならざりしなり、然も彼は彼自らが思科せしよりもより大なる將來の基礎を置きぬ、彼と其妻――女預言者として呼ばるゝ其妻――および其子等――こはイザヤの子等を呼ぶの名稱のみに非ずしてエホバが彼に與へ給へる精神的子孫をも稱呼するの名稱なり――は實に「萬群のエホバの爲し給へるイスラエル人中の休徵および奇蹟」たりし預言者輩の中心點を形成するものとはなりぬ、然り而してイザヤ等が播ける精神的種子はマナセの迫害時代にも殘生してヨシアの改革を促生しバビロンの久しき逐放中にも眞正の宗教を保持して失ふ所なからしめたり、イザヤがかゝる教會(教會と稱する事を得んには)を建設したるは彼がイスラエル人の爲めに爲せし最大事業たるを失はず但しイザヤがシオンの不可侵を說きて當時に大勢力を有せし預言もエレミヤの時代には最

早虚僞となりはて彼が當時の人心をつなげる警語も今や空しき囈語たるに過ぎずなりてイザヤと其揆を一にせるエレミヤは却て死に渡されんとするの悲境に沈淪するに至りぬ然かもこはイスラエル人をして默示の大奇跡は單に比較的眞理たるに過ぎざる外形の誘示にあるに非すして神が其民の中に住み給ふてふ事實に存するを敎ゆるにありき、

紀元前第八世紀以降にありては(其以前の時代に於けるが如く)イスラエル人の宗敎的生活はエホバの個人的指導の下に發達し來りぬ彼はイスラエル人を「人にもちゐる索すなはち愛のつな」をもてひけり勿論此書に於ては詳しくそが發達の有樣を叙述するを得ずと雖然かもイスラエル人が第六世紀代にありてエミヤおよび逐放時代の預言者等によりて達したる幾多の注目すべき階段は之れを見免がす事能はず、夫れエレミヤは新しき契約の幻を見たりこは一部分はエゼキアの外部的改革の失敗に原因し一部分はヨシアが神殿に發見したる一律法書に基ける良計畫の失敗に原因するものなりしが彼は此契約が直ちに實行せらるべしとは思惟せざりしと雖猶ほそが實行がバビロンの逐放――彼が再三エホバの刑罰

なりと痛哭したるバビロン浮囚――よりイスラエル人の歸國するの時にあるべしと信じたり則ちイスラエル人の歸國は新紀元の始なりと信じたり、以爲らく此時代にありてや石の板に彫記せる古き契約は逝て新らしき契約は起るべし則ち心胸に銘記せられ個人の意志によりて生涯の律法なりと嘉納する神命を有する新契約は來るべしと之れ彼が幻によりて發見し得たる所のものなり「吾人はエレミヤがかゝる大默示に接したる翌朝夕の眠の爽快なりしを覺へしを怪むに足らずとなす」然りと雖此驚くべき幻もエリヤの夫れの如くエルサレム市及びイスラエル國民てふ地平線上に脫出する事なかりき、

追放時代に於ける一預言者の預言はエレミヤに比すれば更に深遠なるものなりき則ち彼はエホバの「苦む僕」に關して預言し此僕の性質と其苦痛および事業の實際上の結果を叙述する所ありき實に彼は福音的預言者なるが時としてはイスラエル國民全体に關する言語中に時としては國民中の上流者――肉によるイスラエル人ならざる精神的イスラエル人――に關する言語中に時としてはエホバを畏れ異敎徒と不信の猶太人とに對する證者の聲として自己の心情を吐露す

る言語中に或は亦不思議なる受苦者――眞正なるイスラエル人の道德的美と權能とを一身に集むる事猶ほ恰かも腦髓が生命を代表し全身の苦痛を感ずるが如くなる不思議なる受苦者――を描寫する言語中に眞正なる宗教てふものゝ金線に深く接觸する所ありしなり、彼は第一イザヤが正義の人民には之れが統轄者たる正義の王――普通の人類に超絶し然かも大なる才能を賦與せられたる正義の王――なかる可からずと思惟せしが如く此無名の大預言者――其著書はイザヤ書中に編入せらるゝ大預言者――は正義の民が受くる苦痛こそ神に對する最も眞實なる奉事最も香ばしき祭なりとなし且つ正義の民はそが代表者として最上の代表者を有せざる可からず而して此最上代表者として獨り人民の責任を一身に擔ふの意識を有する一人が隨意に不當なる苦痛と死とを甘受し、エホバはこを人民の代贖として受納し人民は此一人の鞭打せらるゝにより其傷より療さるべしと思惟したり。

預言者が如何にしてかく深遠にして意味深き觀念に達せしやそが思想と經驗の道行は如何、吾人は之れを追溯するに難からず夫れマナセ治下および敬虔勇敢な

るヨシアに繼ける無能なる四王の治下および永年の逐放時代と其以降に於ける迫害即ちイスラエル人中の最も高貴なる人々の苦痛は人々をして人生が今迄思惟せられしよりも更に深奥なる問題を有するものにして古き獨斷說――正義の神の治下にありては義人は幸福なるべく惡人は不幸ならざる可からずてふ古き獨斷說――によりて解釋する事能はざるものあるを悟らしむるに至りぬ然り不當なる苦痛てふ事は最早無視し能はざる事實たるを知るに至りぬ而して罪惡てふものは怖ろしきものにして人の意志に其根底を有し(人は自由なるが故に)全能者の號令もて之を追放し能はざるものたる事も亦了會せらるゝに至りぬ已に罪惡の恐るべきを知る去れば如何にしてか之を破壞し精神的の救拯を獲取し得べき乎、如何にして人は改新せられ且つはバビロンより救ひ出さるべき乎、是に於て代贖的苦痛てふ事は預言者等の心中に起り來り之が解答を與へたり、彼等は以爲らく「エルサレムにて流されたる多くの無辜の血は決して無益には非ざりき」エレミヤがエホバに忠眞なるによりて苦しみしは決して無益には非ざりき追放時代の預言者等が鞭打たれ其頭髮を引拔かれしは決して無益には非ざりき、と蓋

し人は罪惡――假令罪惡が法律習慣の是認する所にしてエホバの是認をも有すと見ゆる場合にも――を行はんよりも痛苦を嘗むるを宜とし苦痛、恥辱、失敗、死を賭して正義を行ふの人は幸福なりと思はれたればなり預言者等の此證言はイスラエル人の良心に正義を確保し邪惡を譴責するの念を振興せしめたり、去れば罪惡は其惡むべき眞相を暴露してイスラエル人――若し預言者の證言なかりせば罪惡を歡迎すべき人々――の嫌棄する所とはなりぬかのホゼヤは遠き昔にありて「エホバは神にして人に非ざればイスラエル人を救ふの道を發見し給ふべし」てふ希望を有しぬ而してイスラエル人がかく靈的發達をなし來りしは之れ彼等を救ふの道には非らざりしか、夫れ人間が正義を愛し同胞を愛し罪惡を憎むはエホバに如かず實に預言者が「かれらの艱難の時、エホバもなやみ給ひ……その愛とその憐憫とによりて彼等をあがなひ彼等をもたげ昔時の日つねに彼等をいだきたまへり」と謂へりしは事の眞相を穿てるの言には非らざりしか去れば神の愛は人間の罪惡に對して苦悶悲痛を感ずるものならざる可からず而してそが救拯の道は感情一偏なる涙の道に依る可らずてふ事も亦明白にして疑なき所

とはなりぬかくの如くにして福音的預言者は「代贖的苦痛が啻に人間的なるのみならず亦神的なるもの」にしてエホバの奇しき僕の死が「啻に殉教若しくは人間の不正に起因するのみならず神の意向と計圖中に存し且つそが任意の犧牲により て贖罪的献物となりし」を知るに至りぬ、而して此福音的預言者が理想中に描がき し所のものは久しきを經てゴルゴタてふ地に實現せられたり要するに彼が經驗と靈的炯眼とによりて產出したるかの驚くべき戰勝旗（イザヤ書五十二章十三章十二）を飾れる一人物――そが絶大の美と尊貴と他人の爲めに苦しむ能力とは古今無比なる巧妙もて書中に描寫せらるゝ一人物――は自己の苦痛によりて當時のイスラエル人を贖ない潔むる救主なり然り當時のイスラエル人を贖ない潔むる救主なりき何となれば預言者等は彼等に直接する刻下の活問題を論ずるものにして神學の組織に關係する者に非ず去れば此福音的預言者も其說く所當時の時事に外ならざりしと雖然かも彼は前代預言者等の如く「彼が知れるよりも更に善く建設したり」、

イスラエルは次の世紀に於て更に劃然たる發達を盡げぬ則ち此世紀にありてか

の追放人は聖地に歸り來りぬ然れども彼等の狀態は預言者等が描寫し人民が夢想したる所とは非常に異なれるものにして殘忍無禮のバビロンは破碎せらるゝ事なく猶ほも繁榮に誇りつゝありき、而してエルサレムは唯そが敗殘裏に立てる茅屋の集合に過ぎずして無恥の諸種族とサマリヤ人――協力して神殿を再築せんとの要求を拒絶して非常なる讐敵となれるサマリヤ人――との嘲笑の標的にてありき、かゝる墳迫に存在したるイスラエル人は若しもエズラの働なかりせば漸次に周圍の異教徒中に沒入し去りて分つ所なくそが道德上の汚れに浸染したるならん去ればヱヘミヤは人民に勸めてエルサレム市の周圍に墻壁をめぐらさん事を慫慂したり之れ一は以て彼等の直接の安全を保全し一つは以て彼等が其特殊なる生活を營むの便宜たらしめんと欲せしなり然れどもエズラは眞正の墻壁を建設したるの人なりき然りイスラエルは此墻壁に確保せられて反省沈思し詩篇――爾來教會の遺物の一として傳はれる詩篇――の中に其思想を發露しバイブルと稱する「神の文庫」を編輯するの大業を全ふしたり。

追放時代にありては(エレミヤ、エゼキエルの如き)信仰ある幾多の祭司學者ありて

イスラエル人の歸國當時イスラエルの信仰維持に努力する所ありしや疑なし、而して彼等は當時細心蒐集せられて非常に尊かりし古代の文書以外に神殿の慣例および祭祀の方法――公衆禮拜より生じ來れる祭祀の方法――に關して精格なる智識を有したり顧ふに「イスラエルの儀禮を構成するの材量は極めて古きものにして舊約の宗教より更に古きもの」たるは疑なしと雖然かも儀禮なるものが時の情況と思想の變化に順應して漸次に形成せられたるものたるも亦疑を容れざる所なり今夫れ古き儀式は禮拜感謝および特に禮拜者は神と共同の生活を分有すてふ觀念を表示するものなり然れどもイスラエル人の罪惡感が預言者の教とそが警告したる刑罰とによりて深くせらるゝに至てや茲にエホバの畏るべき純潔と神聖とはイスラエル人に覺知せらるゝに至りぬ此故に新らしき儀式に於ては罪過を掩ひ若くば之れを拭ひ去ること」を標示するの點に最も重きを置きぬ而して此新儀式たるや忘れ難き實物教授によりてイスラエル人に不撓の正義と赦罪の愛とがエホバに於て合一調諧せらるてふ眞理を領知せしむるに相當はしきものなりき去れば此時よりして以後書かれたる多くの詩篇は之れ幾多の信

仰ある可憐の靈魂が不撓の正義と救罪の愛とを兼有する神を歌へるものにして彼等は此信仰によりてそが最も暗黑時にも平和と喜悅とを享有したるを現はすものなり、此信仰が如何にキリストの贖罪的事業を領會するの基礎をなせしかは希伯來書記者が其書に叙說したる所にして之れを窺ふに難からず、夫完全なる禮拜を爲さんが爲めには人民を異教徒より分離し同時にエホバが摩西の手によりてイスラエル人に任せ給し聖き委托物を保護する所なかる可からざるは明かなり去れば一書は此目的もて編成せられたり而して此書は歷史の古書――マッシユーアーノルドの語に依れば「其財寶を與へ盡して永久に滅したる」歷史の古書――およびヨシアの時代に發見せられエズラ(祭司たる學者)が歸國後殆んど七十年頃にエルサレムに取り來れる律法の書と結合せられたるものにして之れを人民に讀み聽かしめしに深く彼等を感動せしめたりと云ふ(子ヘミヤ八章一―三、九、十八)實に人民は此書によりてイスラエル人の祖先の事より約束の地の征服に至る迄詳しき物語を聞く事を得たり此書は小說の興味もて彼等の過去を演劇的に明寫するものなり、則ち彼等が常に尊敬したる人々、彼等が唯斷片を聞くに過ぎざりし古代の傳說、律法が與へられし當時の怖ろしき光景等此書によりて完全なる一物語に編成せられたれば深くイスラエル人の金線に接觸し其最も聖き記憶を呼び起し彼等に特殊なる强き人種的宗教的感情を再發する所ありしなり去れば「總ての人民は泣けり」此時よりして以降、後に五書と稱せられたる書物はイスラエルの聖き律法として承認せられ之れに比すれば自余の聖き書物は單にそが注解たるに過ぎずと見做るゝに至りぬ而してイスラエル人は此尊き所有物(律法)の爲めには財產若くば生命を賭するも毫も辭すべきに非ずと思惟したり而かも此律法たるや彼等の全生涯を通じ有らゆる人事に其指導を加ふるものにして其頑强なる外皮の中に眞信仰の生ける種子を包藏し時の滿つるに及ぶに至りしなり、

次の四世紀間は往々にして「律法主義の夜」と稱せらる則ち歐羅巴の中世紀が「暗黑時代」と稱せらるゝと其意義同じ然れどもかゝる概括的なる言辭は何等の實狀をも吾人に敎ゆるに足らず何となれば歷史上の長き時代を一句もて寫出せんとするは不可能の事にして極めて不精格たるを免かれざればなり而して律法治下は之れを「夜」と稱する事能はず蓋し此完成の律法は之れ唯だイスラエル人の歷史に

最善最良なりしものを形式に描寫し之れを是定したるに過ぎず今若し假りに其時代が「夜」なりしとせよそが舊約聖書の外何物をも世界に貢献せざりしとするも吾人の感謝の記憶に値するものありと云はざるを得ず但しエズラの時代より律法の遵守が非常に貴重視せられ國民的一致の表象は神殿の儀式および種々の大祭禮によりてのみ發表せらるゝに過ぎずなりしは事實なりかくの如くにしてイスラエル宗教のラビ的祭司的要素は漸次に預言者的要素を壓服しイスラエル人の重力の中心は預言者と生命よりして律法と儀式とに變移するに至れり而して其かくの如くに至りしはイスラエルにとりて不幸なりしは言ふ迄もなし則ちイスラエル宗教は律法主義および儀式主義と稱する偏頗なる發達を遂げぬ而して律法者、儀式者は之れ決して最上なる人間の模形には非ず若しも人間の靈魂にして充分なる發達をなさんと欲せばそは唯だ律法を尊重するのみならず亦活ける神との感合を有せざる可からず而して此神との感合たるや極めて大切なる事にして何物をも是れに代ゆるに足らず、假令夫れ自らは善良なる事物なりとも若しそが第一位を占有して神との感合を第二位に置く事あらばそは遂に有害無害たるに終るを免かれず然れども此時代にありては宗教の外形――例せば聖市神殿、祭司、祭禮、律法、傳說、――に最も重を置きて之れが傾向を防止するに足るものなかりき、祭司と學者とは惡意には非らざるも之れを防止せんとはせず反つて反動的態度に出でぬ去れば預言と詩とは律法の命令よりも輕しとせられ律法は傳說よりも必要ならずとせらるゝに至りぬ夫れ人の生活を唯だ律法一偏のみによりて律せんと欲せば律例は其數を增し加ふるに至るべきは自然の勢にして從て人を見る事小兒奴隷と撰ぶ所なかるべきは論を待たず而して小兒は如何に愛らしくとも奴隷は如何に端正壯健なれば迚て人には非ず、要するに律法主義は決して神聖てふものを發達せしむるものに非ずして反つて逃遁、詭言、託辭、欺騙、腐敗を產ずるものなり蓋し神聖は靈にありて存せざる可らざるものなり嚴酷なる律法治下にありては預言は死し詩も亦逝く勿論人は律法によりて一時は恭謙、熱誠の人たるを得べしと雖遂には狹隘、卑屈、虛僞、たるに終るを如何せん、

律法がかくイスラエル人を壓迫したるより生じ來れる惡しき結果は如何、之れを窺はんと欲せばそが結果として彼等の中に普及するに至れる器械的見解――

默示、啓道（インスピレーション）待ち望めるミシヤの人物、事業に關する器械的見解――および イスラエル人の敎師の大部分――學者、長老、パリサイ人――がイエスおよびパプテスマの約翰に對せし態度および希伯來信者の大多數がパウロに對せし態度を一瞥するのみにても之れを明知するを得べし、

インスピレーションに關する猶太人の見解が果して如何なるものなりしかはラビ輩がエステル書をば預言書詩篇中にありて最上なるものと見做せし事實によりて判知するを得べし然かも事實に於てはエステル書は比較的に劣等なるものなり吾人は舊約聖書の他書を讀でエステル書に至らんか「天より地に墮ちたる」を感ず吾人は「ソロモンの詩」と稱する第一世紀代の敬虔なる一パリサイ人が物せし詩篇によりて當時の人々が期待せしメシヤの觀念を伺ふを得べし、彼等がメシヤに對する希望は實際熱烈なるものなりしにも拘らずそが觀念は之れをイザヤ及び追放時代の預言者の預想に比すれば極めて劣等なるものなりき、メシヤは熱望せられたり然かもこは唯メシヤが羅馬人を驅逐しサドカイの罪人原を覆滅せんが爲めのみ、去ればかゝる精神を有する人民がナザレの大工の子自らモーセ、ソロ

モン、よりも優れる者とすれども王たるを拒みし大工の子――に何等の高尚至麗なる點をも見出す能はざりしは敢て怪むに足らず而して彼の事業は其水平面上に現はるゝ所より見れば極めて小事業たるに過ぎざりしが故にユダヤ人は之が意義を覺知する事能はずバプテスマの約翰すらも之れを領會する能はず使者を遣はして問ふ所あらしめし程なりき彼等は遂に彼（イエス）を十字架につけぬ、こは律法、神殿、エホバ、および猶太人の理想に對して彼がとれる態度に對して茲に出づるの外なかりしなり、パウロの生活を見よ彼の衝突は外部の敵との衝突に非ずして寧ろ猶太的基督敎の指導者および敎會內部の信徒即ち律法を最上となし廢西を終局の權威者となす人々との衝突なりしなり、彼等は實にパウロがアブラハムに賜はれる契約は舊約聖書の默示の精髓なり從て律法はイスラエル人の罪過の故によりて側より入り來りて本來の契約に附加せられキリストの出づるを待ちて廢止せらるべきものなりとなせるを深く嫌惡したり、顧ふにパウロはイスラエル人の思想の遠景を眞實に知了しイスラエルの宗敎に對するキリストの關係が有機的にして律法に對しては革命的なるを領會し、舊宗敎は假令神聖なりとも

不完全にして暫假のものたるに過ぎず而してキリストは舊宗教に存する永久の要素を其新衣裳に織りなして以て之れを成就したるをも領會するの能力を有せしなり、

然れども吾人はイスラエル人の此最後の時代(律法時代)をば正當に領知するを要す眞を言へば吾人は律法が成せる善業を忘却し勝なるものなり、之れ蓋し吾人が新約時代――律法が已に外衣と變じ磨滅したる軛となり了はりし時代――の光明もて之れに臨むが故のみ然かれども律法は數百年間イスラエルに善業をなしぬ去れば之れを高閣に束ぬるの場合にも決して暴慢無禮の言もて之れを待つ可からざるは勿論なり。夫れ律法は亦他の一方面を有す而して此方面たるや前者に比すれば更に大切なるものにして吾人をして依りて以てそが積極的價値を窺知せしむるに足るものを有す蓋し律法は歴史上の境遇によりて生じ來れるものなり而して歴史上の境遇はエホバの奇しき計圖を顯現する事猶ほエホバの嘶やきが預言者の心に其聖旨を顯現するに異ならざるものあり吾人は之れを當時の歴史的境遇より見るエズラと子ヘミヤとは律法を人民に強ゆるの外なかりし

を知る、彼等(エズラ、子ヘミヤ)はイスラエル人の歴史を回顧してイスラエル人が他國民と混合せしより特に異教徒と雜婚せしより生じ來れる結果の如何に怖るべきかを見たり、則ちイスラエルてふ酵母は腐敗し去りて最早パン塊を膨張せしむるに足らず成り果てしを見たり、果して然りしならんには、當時の薄弱無氣力依賴的なる一小團体たるイスラエル人が異邦人と混合するの結果は如何假令預言者の努力と強き國民的生活の刺動を以てするも克くそが墮落の傾向を抑止する事能はざるべし、去れば若しもイスラエル人と異邦人とを隔離するの障壁を建つるに非ずんばイスラエル人の希望は滅し正義の王國を建設すべしてふエホバの約束を實現するの希望も茲に消失し終るに至らん、果して然らば律法はそが預言者の最良なる精神に反すとするも之れに服從せざる可からず如何なる價を拂ふも之れを遵奉せざる可からず個人の感情はイスラエル人全体に亘れる大利害の爲めに之れを犧牲に供せざる可からず去れば子ヘミヤは彼が國民に律法を課せし報酬として恩賞を神に求めたゝ(勿論彼の政略に對して其不正暴戻に泣き叫ぶの人々ありしならんも)エズラは清教徒的の人なりしが故に何等の恩賞をも要求せ

ざりき「彼はパンを食はず水を飲まざりき、こは彼が囚はれし彼等の罪を悲めばなり」、

夫れ免かる可らざるものに心より服從せんか吾人は乃ちそが善美を觀取するを得亦必要なる計圖が其中に存するを窺知するを得べしイスラエル人は律法に服從してそが善美と計圖とを發見したり實に律法は彼等にとりては學校教師にして亦彼等の東洋的情慾を貞節に彼等の野蠻なる粗暴を世界的事業に整齊したりかくて彼等は東洋および希臘文明の中心例せばバビロンおよびアレキサンドリヤ等にありてそが住民の重要なる要素を形成するに至りぬ彼等は異教徒流の生活がイスラエル人の宗教に抵觸矛盾するものあるを知るに及んで漸次に世界の各地に移住することゝなれり、彼等は至る所に官吏として依托人として軍人として高利貸として兩替人として運遭業者として成効したり然かも彼等は自ら宗教道德および人間の光榮たる一切の事柄に於て他國民に超絶するものあるを自覺したるが故に他國民の風習に感染する所なかりしなり、彼等の會堂は高尚なる一神教と道德との證者にして心ある異邦人――自己の宗教が已に死滅したるを

感じたる異邦人――を引着するに足るものなりき而して律法は追放以後のイスラエル人が異教に交讓調和するの危險を徹頭徹尾防止する所ありきかくイスラエル人は其國民的性情習慣を固執したりと雖然れども彼等が他の文明に接觸するや彼等の眼界は茲に廣濶せられしなり去ればイエスの教が普遍性のものたるを識別し之れを有らゆる宗教問題および社會問題に適用したる最初の使徒がダルソに生れたる羅馬市民にしてエルサレムに於けるガマリエルの門下生に出しは決して偶然に非ざるなり、

聖地にありては各家族は殆んど皆道德的生活に訓練されたりこは實に昔への預言者等が仰望して然かも實現せられざりし所のものなりしなり、會堂に於ては人々は預言者の書物と律法とに教養せられ祈禱の幸福なるを學びぬ神殿に於ける壯嚴なる儀式は彼等をして罪惡の觀念、神聖の感覺、エホバの尊嚴に對する意識を深厚ならしめたり、犧牲の祭は心ある者をしてそが含める靈的眞理の曙光に觸れしめたり詩人は當時聖民の間に花咲ける麗はしき敬虔、神の律法に從ふ者の喜、神に於ける信頼喜悦を歌ひぬ幾千萬の人民は人生の最大事業は神に指導せられた

イスラエル

るイスラエル人の歴史――聖書に記せられたるイスラエル人の歴史――を追想する事にして且つ之れを其子孫に教ゆるにありとなしぬ、要するに神の言は空しきに歸せざりき猶太全地に亘りて神の言は青年と老年の心胸に其事業を成効したり去れば新約の曉天にありては新なるエリヤの兩親たるに相當はしきザカリア、エリサベスあり、基督の母たるに適したるマリヤあり夜も晝もイスラエルの慰められん事を祈れるシモン、アンナあり(キリストがナザレのイエスとして現はれ給ひし時一切を捨てゝ彼に從ふに躊躇せず彼が死して甦生し給ひし時何處迄も信仰の道に柔順たるを證せし)牧羊者、農夫、漁者、稅吏、治者、祭司、學者、パリサイ人ありしなり、

第十章　イエス

新約書中の最初の書物はパウロの六書翰にして、こは紀元五十三年より五十八年の頃に書かれたるものなり吾人は此書翰の內容によりてパウロの悔改時則ち六書翰中の最初の書翰に先だつ殆んど十六年代詳しく言へばイエスの死および復

活後間もなき時代に追溯して種々の事柄を窺知するを得べし、此書翰の示す所に依れば當時已にユダヤ的およびスリヤ的希臘的羅馬的なる諸思想が流布せる幾多の中心地にありて基督教徒は已に業に團体を組織し居りてそが新生命は强大なる勢力もて動作しつゝありしなり、去れば基督教徒の團体にありては男も女も齊としく信仰と希望と喜悅に滿ちて貧獄火、及を嘲笑し前代の偏見と箝束とを超然離脫する所ありき、而して此團体たるやそが根底を信仰に有するものにして詳しく言へばメシヤ即ち基督はナザレのイエスてふ人物となりて已に世に出現したりと云ふ事、彼は死より甦りて神の許に昇天したりと云ふ事、彼に依りて罪の赦しと新生命とは全人類に與へらるべしと云ふ事をそが團体の組織的信條とはなしぬ、勿論彼等イエスの信者は重要なる事柄に關して意見を異にせし事なきに非ずと雖然かも救主に關する教に至りては全く相一致したり「聖パウロは實に以爲らく猶太的基督信者にして若しも基督の事業の絕大なるを實際充分に領會するに至らずんば彼等は基督の眞意に戻り福音の意味を廢棄すべしと而して教會歷史中のパリサイ的エビオニ人はパウロの警告を實際に實現したるものなりとす

イエス

かく言ふと雖パウロは基督の人物若しくは復活の眞實に關しては當時――――復活せる基督を見たる人々の大部分が猶ほ生存したる當時――――にありて使徒の中にも教會の中にも何等の議論ありしを示さず、實にパウロの如き經歷と性格とを有する者がかゝる時代にありて一切を犧牲としてナザレのイエスはメシヤなり且つ此信仰こそ使徒等が建設せる凡ての團体の基礎なりと主張したるは喫驚すべきの事實なりと云はざる可からず、

パウロは他の使徒等が經過し來れると異れる經路をとりて眞理に近かづきぬ然れども彼と使徒等とは終局に於て同一の中心點に相合したり、夫れパウロは始めイエスをば甦生せる榮光の基督なりと觀じぬ此默示たるや彼が是迄力を盡して教育せられたるメシヤ觀――――之れが爲めには死をも厭はざりしメシヤ觀――とは非常に異なれる所のものなりしなり、去れば彼が此默示に接して煩悶苦惱死に瀕したるも敢て怪むに足らず彼は直ちにアラビヤに往き彼處に退く事三年新默示の光明によりてイスラエル人に與へられたる神の默示を領會し此新舊默示をば調諧整頓する所あらんと欲しぬ、他の使徒等の經驗はパウロと全く異なれり、

かの福音書――――明白に使徒の傳說(口傳及記錄)の信據すべき消化物たる福音書――――は如何に彼等がイエスを友として弟子として幾年か同棲したるか彼等の信仰が如何に個人的愛情と信任を基として遂にメシヤとして彼を受け容るゝのみならず亦神の子として彼を禮拜するに至りしかを吾人に明示するものなり」、

現時高等批評はパウロの大書翰が實際パウロによりて書かれたるものにして福音書が書かれたる時代も比較的に早きにありしを確定したれば吾人は今や歷史的イエスと相面接して其音容に接するを得、實に彼は信仰ある心情が一千九百年間理會したる如き有樣にて明白に吾人の面前に屹立す、吾人は彼の品性と教と事業との諸點――――其眞相を窺ひ其言に接すれば何人も直ちに其膝を屈し其舌も て彼は主なりと告白せざるを得ざる諸點――――を枚擧するのみを以て滿足せざる可からず、

イエスの性格は諸の反對せる善德を均一に結合したるものなり嚴密なる一批評家(マッシユー、アルノルド)はイエスの健全なる道理性を喋々し他の批評家は彼の熱情を吹聽す、博士ホルトンは曰く「如何なるストイック人も罪惡を明示し痛く之

れを非難するの度に於てイエスに及ぶ者なし然かも最も柔和なるエピキユリアンも平靜文雅もて自然界の動作を認知するの點に於てイエスに優る事なし」と詳しく言へばイエスは希臘の二哲學の兩極端の美を一身に結合したり、ストラウスは猶太的要素と希臘的要素とがイエスに存在せしを發見したり而して此兩者は正反對の文明を示すものにして三百年間相調和せんとして能はざりしもの今日までも充分に調和し能はざる所のものなりとす「彼は彼自身より見れば孤獨なれども人類より見れは彼は實に萬民の友にてあるなり彼には毫も國民的特性と稱すべきものなし然かも彼は有らゆる國民が一文明に到達するや直ちにそが國民性に至大の感化を與ふるなり」夫れ猶太人と希臘人との間には非常なる深淵の存するあり希臘人と野蠻人との間にも然り、男性と女性との間の相違は如何に根本的なるぞや、然かも猶太人も希臘人も野蠻人も男も女もともにイエスにありてそが理想と鼓吹とを發見す、顧ふに地方的性情を欠如するは多少大人物の特色とする所なりと雖そがイエス程完全に理想的なるは未だ曾てある事なし而してイエスにありては此普遍的性格は單に普遍的性格たるに止まるに非ず他人に對する

の思ひやり――則ち彼をしてゲッセマヂの痛苦の時にも疲れたる弟子等に「今は臥て休め」と言はしめたる思ひ遣――と結合し、個人的家族的愛情――則ち彼をして十字架より見下し母の將來を托せしめたる愛情――と結合し、個人的清淨神聖――則ち彼をして其敵人に向て「爾等のうち誰か我を罪に定むる者ありや」てふ冷靜なる挑戰をなさしめたる清淨神聖――と結合したりしなり、猶太人も希臘人もかゝる性格を心懷する事能はざりき實にかゝる性格は猶太人の理想にも希臘人の理想にも異なるものなりき、夫れ希臘的および猶太的感化の調和は唯だファイローおよびアレキサンドリア人の如きを產出するに過ぎざりき然かもイエスは眞のイスラエル人が必然に頑迷なりと見へし時代にありて世界共通の教會を建設したりと雖撰民中にありて發達せし善德の一をも自己の王國の擴張に犧牲たらしめし事なかりき、例せば異邦人は社會の基礎たる貞節眞實の二德に對して不充分なる觀念を有したり則ち希臘人は貞節の義務は獨り女子に存して男子には存せずとなしぬ去ればパウロは彼等に敎ゆるに肉を食ふの自由は決して男女間の關係の自由を意味するものに非ざるを以てし不品行の基督

教と兩立す可からざるを示しぬパウロ以爲らく基督は靈と肉体とを救拯したり肉体は主と結合せんが爲に造らる故に肉体は食物の如くに朽つるものに非ずして基督の如く不滅なるものなり去れば他の罪惡は身の外にあり「然れど淫を行ふ者は已が身を犯すなり」こは人の全性――身をも靈をも――を墮落せしむるものなり、と此故にパウロは貞節と家族的清潔との神聖なる義務をば基督教に大切なる事柄なりとして懇説したり、然り而して世は亦眞實てふ義務に對して不完全なる觀念を有しぬ第五世紀に於ける基督教徒すらもオーガスチンが此義務をば基督教道德に至要なるもの、一なりと宣言せるに對して彼れを余りに嚴酷なりと思へり、イエスはサタンを虛僞の父となし通常一般の談話に眞實なるべき事猶ほ是迄契もて交はされたる約束に讓る可からずとなしぬパウロは眞實の尊ぶべきは人類がともに兄弟にして一結合体なるが故なりとなし基督と一なるが故に貞操ならざる可からずとなせると其論據を同じくせり、

夫れ人類てふ大家族の各支派は夫れ自らに特殊なる榮光と名譽とを有す、基督は此榮光名譽をば歡迎し亦嘉納す各人種は基督にそが同情を發見するのみならず亦自己の夢想せざりし完全の度に於て基督の裡に自己の特質の具備し居るを發見す、此故に國民にして新たに基督教徒となるものあるか人類全体は爲めに一段の進歩を加へて完全なる人――即ち總てのものに滿てる彼の滿ち足れる人――に進歩發達するなり今夫れ基督教は遂にイスラエル人の貞節と眞實と希臘人の美感と智力と羅馬人の特色たる服從と紀律とチユートン人種及びスカンヂナビア人種の强き個人主義と婦人尊敬とを吸收したり而して其他の人種が秀でたる諸德も亦基督の御璽を受けざる可からず東洋は基督教化せしめざる可からずイエスは東洋に生れたり、而して彼は千九百年の間西洋の生活と思想とを支配して今や東洋に其王國を進めつゝあり、かのケシャンブ、キャンダルセン、バナルヂア、および、モゾマダーの如き東洋人は基督の完全無欠なる性格を形成する要素たる衆德を發揚證驗して以て東洋をして彼を受け納れしむるの準備をばなしつゝあり、

基督が罪惡に對する態度と彼が無罪とは齊としく世界無比なり、夫れ罪惡の眞相を領會するの教育を受けしはイスラエルに如く者あらず、げに「律法によりて罪は

知らる」聖書に示されたる罪惡觀の明白深遠なるは之れを他國民の罪惡觀の不明惑亂せるに比較して極めて著大なる差異たらずんばあらず聖書にありては罪惡は自由意志によれる背神の謂なりとしてそが眞相を明示せらる。パウロは羅馬書に於て罪惡の普遍性を示しそが遺傳との關係を說きぬ彼は亦罪惡の勢力の怖るべくして律法の之れを如何ともなし能はざるを示し以て救主としてイエスを宣傳したり、彼は全然自己の罪惡觀に基づきて歷史および救拯の哲學を構成したり、以爲らく異邦人は其心胸と自然の性質とに書かれたる神の律法に反きて罪を犯したり而して猶太人は更に明白なる律法に反きて罪を犯したるが故に異邦人に勝れる罪人なりとパウロは彼自らの經驗によりて律法が唯だ罪惡の罪惡たるを知らしむるに過ぎざるを悟りぬ曰く「夫れ律法に貪る勿れと言はざれば我貪慾の罪たるを識らざる也」と今夫れ罪惡は吾人の裡に存する勢力にして人間進步の障礙なり常に發達の進路を妨礙し停止するものなり、罪惡が決して發達の要件には非ずして反て之れを妨礙するものたるは自己若くは他人を革新せんと企つる人々の經驗して疑ふ能はざる所のものなり顧ふにイスラエル人をして罪惡に關する

る此眞理――――靈的精神を有する人々は現時何人も承認する此眞理――――を知らしむるには余程長き敎育を要したり、實に今日にありても罪惡を感ずる能はざる程其靈的能力の痲痺せし人々なきに非ず彼等にとりては基督敎の罪惡觀は憎惡すべきものにして罪惡の勢力を滅却すてふ救拯の敎は嫌棄すべきものなるべしと雖然かも彼等にして其貴重視する善行を行ひ社會外部の改善を促して以て人々の向上進步を企圖せんか彼等は必ずや社會の害惡がかゝる改革によりて療治せらるゝものに非ざるを確信し人心の根底に達するの療醫法の切要なるを感ずるに至るべし、かくて基督の十字架の意味は往々にして彼等の認識する所となるなり、

イエスは其公なる事業の始めに於て惡魔に試みられん爲めに野に行けり、彼が其誘惑に對する態度とそが勝利とは彼の全生涯の有樣を最も克く代表したるものなり彼が其事業の最後に於て「此世の主きたる……彼われに與ることなし」と謂へりしは彼が世の罪惡に無關係なりしを言出したるものなり實に彼は人なりしかども無罪なりき、彼の意志は聖靈の指導の儘に働きぬ「彼は罪を犯す事能はざり

き何となれば罪とは神に叛する事にして而して彼は人間に於ける神の子なりしが故に彼が德行の器具たりし人的意志は罪惡を撰擇する事能はざりしが故なり」、かの聖アフガスチン、聖アンセルムが證言したるが如く「基督は若しも欲せしならば、服從を拒み得たりしならん然かも不可能なる一事は彼が罪惡を執意する事なりき」と言ふは正當至極の事なりとす、彼は自ら無罪なりき此故にパウロ、アフガスチン、ルーテルが有せし如き罪惡の經驗なくしてそが傳道の始めより萬民の罪惡を認知し其眞相を明知したり、彼は人間が皆惡しき者にしてそが各自の相異は唯五十歩百歩のみなる事をば自明の眞理として假定したり去れば彼は萬人に對して其使命たりし悔改を宣傳し其弟子をば各所に遣はして悔改を宣べしめたり、彼は世界全体の醫者なり此故に彼は最も墮落せる人々を呼び集めたり之れ彼等が最も醫者の助を要したればなり彼は勇士を縛して其家財を奪ふの救者なり、彼は罪惡に關してはそが看破者、勝利者、審判者としての外何等の關係をも有せず、

イエスは無罪なり此故に彼は自ら萬民に王たりと要求しその神權もて萬民の忠誠を要求す、曰く「我に來れ」曰く「我に從へ」と蓋し彼は其羈絆より彼等を解き放つべ

ければなり、エワルト曰く「罪惡が人間の眞性に基くものに非ざる事は基督に罪惡てふものなかりしをもて證となす……而して吾人は彼に依りて彼の如き自由に達せん事を仰望す」と、

イスラエル人に與へられたる神の默示と、自然界と人生とに與へらるゝ默示と、神自身と未來とに對するイエスの關係は如何、

（一）彼がイスラエルに對する關係よりすれば彼は基督即メシヤにしてイスラエル人が久しき以前より仰望したる一人として義の王國を建設せんとして生れ來れる者なり、イエスは大膽に先代の預言を一身に引き當て彼にありてそが成就せられしを宣言したり以爲らくアブラハムは彼の日を見たり但し彼が見たるは吾人が一恒星――之に近づきたらんには赫たる一太陽にして更に之れに近づきたらんには驚くべき生命に滿てる一大宇宙たるべき一恒星――を望むが如きに過ぎざりき、モーセは彼に關する事柄を記述したり、總ての聖書は彼に就きて證言する所ありきと、

イエスがイスラエルの歴史に對して取れる此態度は何人も未だ曾て取らざりし

所のものにして如何なる大偉人も前代の幾百年と先代の預言者とは證者にして亦我に關する事柄を天下後世に遺したりと言はゞ必ずや世の嗤笑を受けざるを得ざるべし然かもイエスは二千年の歴史を回顧して悠然として「時は滿ちぬ」と宣言しイスラエルの宗教は老朽逝去すべけれども「そが日沒は唯だ更に高尚なる新生命の出現の曉天に外ならず」彼にありて神が種々樣々に告げ給へる約束は實現せらるべく、彼にありて曾て人の心に調和し難かりし所のものは調諧一致せらるべしと言明したり吾人は彼が此確信の根據として自己が永遠よりの存在者たるを宣言し約翰も亦其福音書の始めに同一なる説明を與へしを當然至極の事なりと思惟せざるを得ざるなり。

イエスが過去に對して取れる態度は此の如く他に類例を見ざる所たり而かもそが明白に進化法と一致するに至りては亦實に世界無比なる事と言はざる可からず吾人はイエスをば完全なる宗教の創立者と見做し以て過去の歴史を回想するによりて始めて整然たる一道の進化がイスラエルの宗教に存するあるを見るなり、世に突如として新宗教を發明し唱出する者あり、かゝる人々は眞面目なる研究

に値せざる人々にして其宗教も亦顧みるに足らず眞正の宗教てふものは人類と其齢を同じふする程古きものならざる可からず而して古來地球上の諸國民は眞宗教を模索したり、然れども イスラエル人のみ獨り全力を盡して之れが追求を行ひぬ而して「遂に國民の政治的死滅を代價として之れに達するを得しのみ」去れば イスラエル人の歴史は宗教研究者にとりて極めて大切なるものにして其等閑に附す可からざる事猶ほ美術研究者に希臘の美術の看過す可からざるに異ならず イエスは舊約書を無視せんとはせず其生涯の大危機に際しては必ず之れを引用し亦常に敬虔なる言辭もて之れを尊重したり、彼は其弟子等の中に彼の教が舊約書に優るの故を以てそが(舊約書の)無用を論ずる者あらん事を豫想して「われ律法と預言者を壞つために來らず」と強き語氣もて語り進で律法の最と小なるものを破り亦其如く人に教ゆるものは「天國にありて最と小なる者と謂はるべし」と警告したり、吾人は此警告の極めて必要なりしを見る何となれば基督教が論爭したる最初の似而非眞理はノスチシズム――則ち舊約書を基督教以外の神および其敵神の作なりと唱ふる教――にして而して亦後世舊約書を輕侮する無智者に

乏しからざりしを見ればなり、

イエスは古き基礎の上に立ちぬ、而かも彼は亦之れを批評し之れに超絶し之れが基礎上に建設する所ありき、摩西は唯僕のみなりき彼も其後継者も宗教に終局の決定を與へたるものなし彼等が語りし所は一時的不完全なる事柄に過ぎざりしなり、夫れ「律法の一點一劃も遂げつくさずして廢ることなし」てふイエスの言は人口に膾炙する所のものなり而かも此句の後部即ち「遂げつくさずして」の語は之れを除去するを許さず此語の意味は律法の全体が其定められたる完成成就を免かれざるべきを謂ふものなり、實にそが一點一劃は過ぎ去りぬ、全舊約の組織——其政治、社會、立法、儀式、道德の組織——は永久に過ぎ去りぬ但しこは全く消失したるに非ずして福音と合體し福音中に生存し其榮光は「優れる榮光」と結合したるなり別言すれば基督にありて而して唯基督のみにありてイスラエルの宗教は猶ほ生存殘留す、歴史はイスラエルの宗教が基督を離れてはそが單に化石に終るを證驗す、

(二) 自然界と人生とに對するイエスの態度は如何、現時凡ての有神論者は自然

界と人生とが神聖なるものにして其音聲が神の聲なりてふ事を信ずイスラエル人は其一神教によりて此觀念に到達し來りぬ、創世記に於ける世界創造の二つの記事は詩篇第百〇四篇と等しく之れ詩と稱すべきものなるが此三詩は萬物が神より出でたるものにして神が「原野の主にして亦山嶽の主」たり地と天とは神の衣裳なりてふ思想を有するに於て一致するものなり「汝これらを袍のごとく更たまはんされば彼等はかはらん、されど汝はつねにかはることなし」今夫れ印度古代の讃歌は自然界の美はしき事物を讃美す然れどもそは神々として別々に禮拜するの弊を免かれざりき、之れに反して希伯來の詩人は有らゆる自然界の善美を集合してエホバの面影を偲ぶ彼等はエホバをヘルモンの白峯および洋々たる夏洋の笑聲の主なりとなし西海より來りて北山の頂を打ちカデシの荒野を一過する雷風の轟聲はエホバの聲なりとなしぬ彼等は洪水の音に神の聲を聞き夏の穀物の葉末に置ける數限りなき朝露に神の微笑を見たり彼等に取りては雨は神の河にてありしなり彼等は亦神は獸類に其食を與へ亦鳴く小鴉にあたへたまふと歌ひぬ彼等は神の正義の絶大なる高さと深さとを思念しながら同時に此高尚なる

思想を低き人事に及ぼし神より受くる日毎の恩惠を感謝するを怠らざりき則ち曰く「神よなんぢは人と獸とを護りたまふ」と、

猶太人の此世界觀はイエスによりて其最高點に發達し來れり、イエスにとりては世界は外部的超自然の神の受造物に非ずして天父の意志を反射したるもの亦包藏するものなり、彼(イエス)は子が父の書ける書物、父の畫ける繪畫、父の構み立てたる音樂を愛するが如くに世界を愛しぬ、蓋し此等數者は父を顯現するものにして子は心より之れを愛好す、イエスが世界に對する實に此の如くにてありき、イエスは田舍に生活して都市には稀れに寄寓するに過ぎざりき、其エルサレムに上るの時すらも夕にはオリブ山に登りゲッセマネの園に遊びベタニヤに親しき家庭を見舞ひぬ、彼は其弟子等をば或は田甫に或は小川のほとりに或は湖畔に或は百合花の生ずる廣野に或は鳥類の舞ひ歌ふ彼所に、或は山腹に或は微風そよ吹く丘上に或は巖窟に滿てる谷間に導くをもて其習慣とはなしぬ、而して是等の光景は一々イエスの敎にそが基礎を供給し若しくは之れが說明を與へたり則ち言へらく「野の百合花を見よ」「かの草を見よ」「空の鳥を見よ」と彼は實に此の如くにして其最も

福音的なる敎訓――爾の敵を愛せよ――てふ敎訓――をば神が爲し給ふ尋常一樣の事柄の中に發見したり曰く「天の父は其日を善者にも惡者にも照し雨を義き者にも義からざる者にも降らせ給へり」と願ふに此の如き世界間は之れ眞に物質界を聖化するものにして前代未だ曾て見る能はざりし所なり、彼は自然界の敎より進んで吾人の裏に存する靈性の尊きを敎へ信仰の大切なるを說きぬ但し彼が言ふ所のものは世捨人の聖の口吻とは全く異なり寧ろそが正反對にして食物、衣服、金錢の必要なるを說き、かくて花に美裝を與へ獸に食物を與へ給ふの神は其子供等の必要に應じて此等のものを與へ給はざる事なしと敎へぬ彼は亦附言して謂へらく異邦人が是等のものを求むるは彼等が孤兒にして父を知らざるの憫然なるに因由す別言すれば彼等が賴邊なきの致す所のみ然かも爾等は神の子供に非ずやと彼はかく神を信任したり而して彼の生涯は實際此信任の眞情を說明するの活畫なりしなり、蓋し彼は王宮に住みて追放者に信仰を說き高樓に居して憐れなる農民に敎ゆるの人には非ずして「狐は穴あり天空の鳥は巢あり然れども人の子は枕する所なし」てふ生涯に安じたる人なればなり、

(三) 神に對するイエスの態度は如何

彼は神に對する自己の關係が特別無比なるものにして自ら神の子たるを自覺したり、曰く「父と我とは一つなり」と而して彼は此父子の關係を管に彼自らのみならず廣く萬人に實現し得べきものとなしぬ、夫れイエスは吾等人類と同じ情の人なりき彼は饑へ、渴き、疲れ、眠りたり而して彼が十字架を負ふの時にありてや彼の肉体は之れを擔ふに堪へざる程疲勞しありき、彼は惱み、憤り、悲み、喜びぬ、而して其同精と悲哀とは彼をして往々長大息せしめ呻吟せしめ、泣かしめたる程なりしなり、一聖書記者は謂へらく「彼は悲によりて完全なる者とせられたり」と詳しく言へば彼は悲痛てふ路――神が常に大偉人等をして歩まざるを得ざらしめ給ふ路――によりて最も深遠なる眞理に達したり、カーライルがダンテを評するの條に曰く「こは甚だ驚くべき事なり然かも同時に彼が爲せる事業は若し彼の生涯がかく迄の悲痛なかりせば成就し能はざりし所のものなり」とイエスは亦其智識に於ても有限なりし事明白なり而して此有限なりし一事は彼をして人間たるの經驗をなさしめたるものなり、彼はかく純然たる人性を具へたりと雖然かも此純粹なる人

性は絶對なる神性と抱合混和し居りしなり見よピリポが「吾等に父を見はし給へ」と叫びし時イエスは之れに答ふるに殆んど譴責の言を以てしたり曰く「ピリポよ我かく久しく爾とともに在りしに何ぞ父を我に見はせと云ふや我を見し者は神を見しなり」と顧ふに眞理は人間意識の形狀もて吾人に示されざる可からず而して神の顯現は其完全無欠なる子によりて現はるゝよりも至大至高なるものある事なし實にイエスは神を顯現して人を神に接近せしめ小供等および小兒の心を有する人々に神を認知せしめたり而して彼が與ふる神の顯現は若し之れを適當に示したらんには最も高尚に發達せる靈的意識を有する人々の直ちに嘉納するに躊躇せざる所のものなり、今夫れ「神と人とは極めて相似たるものなり而して神は其神たるの性を失はざれども其存在するや實に人たる性格に於て存在す、而して人は亦毫も其人たるの性を失ふことなくして神の器具たるを得」此故に神の化身は人間に對する神の完全なる顯現の必要より生じ來れるものなり而して此完全なる顯現の必要は之れ神性に固有なる善美の然らしむる所なり詩篇に曰く「エホバはめぐみ深くして直くましませり斯るが故に道をつみびとに敎ゆ」とかの預

イエス

言者と稱する人には幾分か神を顯現したり、而して彼等は之れを爲すに方りて(吾人の知る限りにては)皆苦みの杯を飲みぬ、歴史を墮落に救ひたる總ての偉人の生涯は神を顯顯したり而して彼等は神の精神を服膺せる程度と同僚人類の罪惡に同情するの程度に正比例して苦痛の經驗を嘗めぬ、去れば或人が「神若し罪の此世に現はるべくんば悲哀の人たらざるを得ず」と謂へりしは至言なりと云ふべし、プレトーは宣言すらく完全なる人にして若しも世界に現はるべくんば彼は「嫌惡せられ迫害せられ磔殺せらるべし」と、

果して然らば吾人は大預言者若くば神の證人として出現せるイエスの生涯が悲の生涯たりしを怪むを要せず蓋し想ふにこは之れ神が世界に存する罪惡を罰し給ふものに外ならず、但しイエスの生涯には亦他の方面の存するあり、則ちイエスは人の言に優る平和と喜樂とを有したり、こは彼が神と一つなるよりして生し來れるものなり、彼は神と一なりき之れ彼をして悲哀ならしめ同時に之れに勝つの力を與へたるものにして預言者としての事業を彼に完成せしめたる所のものなりしなり、こは之れ實に神の定め給へる父を顯現するの良法なりき吾人は彼にあ

りて肉と血則ち割かれたる肉と流されたる血に最高の眞理を窺ふを得、吾人は彼にありて我等と神との關係を窺ひ吾等自らも神を顯彰し得るものたるを認知するを得、かくて吾人は神が吾等の靈性にとりて父てふ親しき關係に在まし給ふを知り神が吾等に爲し給ふ萬事は愛の聖旨に外ならざるを領會するを得るなり、かくて吾人は神を天父と觀ずるによりて茲に眞に神を知り永生を得るなり何となれば救拯の權能が父てふ一事に存するは之れ即ち神の榮なればなり實に吾人が神を愛するは全能力の奇蹟に依るに非ずして神の父心に存する善美の結果に外ならず何となれば若しも神にして愛慕すべきの父心を有し給はざりしならば救拯は不可能事たるべきは勿論の事なり別言すれば若し神にして感激すべきの慈心を有し給はず吾等をして自ら進で彼と調和し自ら深く自己の罪惡を譴責せしめ彼を慕ひ彼を愛せしめ以て神子たるの本性を發揮せしむるに足るものなくんば救拯は望む可からざる事たるべきは明らかなればなり、

イエスは父子の意識を人に喚起せんとなしぬ彼が目的とせし所のものは父の愛を世に現はし之れによりて世を救はんとに外ならざりき、然れども古來イエスの

事業を淺薄に解釋しイエスは唯罪の罰より我等を救ひ來世の幸福を與ふるに過ぎずと思惟せられし事一再に非ずマホメットが其信徒に約束せし所のものは亦此事なりき然れどもかゝる祝福を目的とせんか、そは唯人間自然の利己主義を涵養するに終らんのみ、勿論かゝる祝福は基督の事業の結果として生じ來るや論なし、然かも唯此祝福に心醉せんか人は遂に罪の刑罰をば罪其物よりも大なる不幸となし基督によりて賜はる惠をば基督自身よりも大なる賜物となすに至らんのみ夫れ基督が其悲哀寂寥の中にも自から慰藉となせしものは人類が彼と等しく神の子たるを得べしてふ希望にてありき、此希望や實に彼の前に置かれたる悅樂なりしなり、彼は多人類に對して此希望を有したり何となれば全人類は彼の兄弟なりと思惟せられたればなり、彼は吾人人類の心裡には彼が永久の子として始めて發揮したる善德の良性を有するを知りぬ、彼は自ら(パウロが言へる)第二のアダムにして活かす靈天よりの主たるを自覺し彼れ自ら聖靈を有するは則ち聖靈が人類に與へられしを證するものなりと思惟したり彼が有せし此希望や實に彼の心胸を充塞したり何となれば彼は人類の本性の善良なるを認知し彼等が彼に加

へたる憎惡が決して其本性に出でざりしを知ればなり、彼は亦最後の苦痛時に彼を誹謗したる人々が己れの死の力によりて其心に深く悔恨すべきを確信して祈禱すらく「父よ彼等を許し給へ彼等は其爲す所を知らざればなり」と、

イエス――――人類の大預言者たるイエス――――は其神子たるの完全生活によりて父を顯現したるのみならず彼は亦祭司として父を顯現したり而して吾人は彼が此方面に於ける事業に於ても人間が――――罪の充分なる懺悔と罪惡に對する神の義しき審判の充分なる是認と罪惡に對して深嚴なる呵責とを持して――――神前に近づき得るは獨り化身の事實によるの外なかりしを見る、實にかゝる徹底的なる懺悔、審判の智識、罪惡の譴責にして有る事なくんば神と人との調和は到底望むべきに非ず是に於て乎イエスは吾人人類の代表者として神に近づきぬ而して彼は神の譴責を起せし罪惡を輕減せんとはせず罪惡に對して充分なる懺悔をなし神の正義に相當はしき心もて罪惡に向ひたりこは實に神の性質に叶ふ滿足なる祭にして律法を擴充し之れをして尊からしめしものなり、こは之れ有らゆる罪惡に對する無慾燃如の憎惡を含有するものにして神性の外憐むべき吾人罪人

が有する能はざりし所のものなりしなり玆に吾人の記臆すべきは愛は正義に比して更に一層純潔と高貴とを欲するものなりと云ふ事および正義は唯愛の下等なる一形狀に過ぎずと云ふ事なりとす、基督はかく吾等の爲めに若しみ吾等の罪の爲めに死して贖となりぬ而して神は基督によりて罪人を赦し給ふと雖も律法を蔑視し給ひしには非ず蓋し律法は憐憫が正義と成りて現はれたるものに外ならず何となれば正義は人をして罪惡に對する憎惡を高めしめ亦其生涯をして一貫せる悔改たらしむるものなればなり、

基督の贖罪的苦痛に關する器械的見解はそが道德上の美と勢力とを曖昧ならしめたり、聖書に記載する基督吾等の爲めに負債、代價、賠償、を拂ひたりてふ記事すらも靈的眞理を形容したるに過ぎざる物質的譬喩のみ基督の事業は債務者の爲めに債權者に辨償する第三者の働にして吾等自身の狀態と神の心の如何に拘らず吾等を益するものなりと思惟するは怖るべき迷謬なり罪人は單に基督の死によりて救はるゝには非ず基督の死を自己の死として認容し基督の心に服從する者のみ救はるゝのみ去れば罪人は基督と俱に十字架につけられざる可からず斷へ

ず基督を自己の犧牲として俸げざる可からず而して彼自ら生ける供物たらざる可からず彼は自ら自己の祭司ならざる可からず、而して彼が基督の犧牲を我物となせりや否や、別言すれば救はれたりや否やの唯一の證據は其靈肉を基督の如くに神に俸げしや否やに存す（羅馬書十二、一）顧ふに基督が神の義を充分に滿足せしめたりてふ事は彼が神と離る可からざる一致を有したるの事實によりて知るを得べく彼が吾等の代贖となれりてふ事は彼が人間と離る可からざる一致を有したる事實によりて伺ふを得べしかくの如くにして吾人は彼が神と人とに對する眞實なる關係を認むるを得べく彼を吾人の預言者、吾人の祭司、吾人の王として受け容るゝを得べし、

（四）彼が未來に對する態度と關係は如何

彼は宣言して謂へらく、ソドム、ゴムラの刑罰は彼の遣はせる弟子等を受けざりし邑に比すれば却て輕しと彼は將來を觀察して萬民が彼と其十字架に集ひ來るべきを豫想したり彼は亦其弟子に命じて萬國の民を弟子とすべきを以てしたりこは天のうち地の上の凡ての權は彼れに賜れるが故なり、彼は亦世の終を洞見して

自己を王として描出し末日審判の席に最上審判者として立つべきを教へぬ、而して此審判は人類の最と小なる者になせるは則ち基督になせるなりてふ原則によりて裁斷せらるゝものなりとす、

かゝる觀念は、獨りイエスにのみ見る所にして他に之れが類似を見る事あるなし勿論他に二個の之れに似たる場合なきに非ず然かも之れすらもイエスの超然として比類なきを證するの資たるに外ならず、

釋迦は其弟子等に敎へて往て「法の車輪を廻轉すべし」而して多くの弟子を得べしと命じぬ、而して弟子等が敎ゆべかりし眞理は自修仁愛にして之れに達するの道は萬人の等しく享有する所のものなりてふ事なりき、釋迦が此傳道が成効すべきを預想したる根據は如何曰く人が生てふものを一樣に嫌棄すてふ事および人は此生を脫却し無限の輪廻を脫離するを欲すてふ事なりき詳しく言へばそが根據は消極的のものに外ならざりき而してこは或は生存を堪ゆべからざる重荷なりと思惟する人心を牽引するに足らんも壯健なる精神を有する人々には何等の勢力を有するものに非ず勿論釋迦の生活は極めて善美なるものにして其傳道の

成効も亦驚くべきものなりき然れども佛敎は遂に失敗したり而してこは釋迦が神――吾人が生き動き亦有る事を得る所以の神――を顯現せず修心順從の生ける根本として彼自らを神に俸げざりしに因由せずんばあらず、

マホメットはメッカに於て「彼の劍を得」諸王と諸國民とにコーランの受け容るべきを命じぬ而して亦神と神の預言者たる彼との一なる事をも信奉せしめんとしたり、彼は不完全に神を顯現したるに過ぎざりき而して彼は彼自ら不完全なる人なりき彼にして若しも萬民が遂には彼の言を信ずべしと信じたらんには暴力に訴ふの必要を見ざりしならん然かも彼は之れを信せざりしなり、何となれば彼は自己に對し眞理の權能に對し人類に對して無上の信仰を欠如したればなり、

イエスの場合は甚だ異なれり、彼は平靜に彼の王國の傳播を預見したり、彼の信仰は確乎たるものにして自己の失敗が最も眞面目なる弟子等を絕望せしむるに足るものありし時にもそは絕對的にして動搖する事なかりき、彼は何人よりも克く人類――彼が其根にして亦枝たる人類――が罪惡あるものにして亦薄弱なるものたるを知れりと雖然かも此人類に對して深き信仰を有しぬ、彼は決して外

部の援助に依賴する事なかりき、十二軍余の天使を呼び下すを得べしと信じたる時すらも之れに依賴せんとはせざりき、彼は世の有らゆる勢力が彼に反抗すべきを知りぬ而かも彼の要求は根本的にして世界と肉体とが斷へず背叛すべきもの彼の信徒をして必然にそが近姻愛者と離反せざるを得ざらしむる性質のものなりしなり則ち彼が世に來りしは「平和を致さんが爲めに非ず刄を出さんが爲め」なりしが如くに見ゆ、然れども彼が用ひたる刄は人の心靈を判斷するの靈的刄に過ぎざりき彼は此刄が齎せる騷亂戰爭の切迫したるを洞察したると共に福音が酵母の如く芥種子の如く膨脹發生して全世界に蔓延し萬國民皆東より西より北より南より彼を主なりと呼び彼の救を喜ぶに至るべしと豫想したり、

かく未來に對するイエスの態度は著しきものにして彼れの外何人も未だ曾て胃取せざりし所なり、而してこはイエスが唯に神の子たるのみならず亦「父の生み給へる獨子」たるを自覺したるを表示するものなり實に彼れはモーゼ、エリシヤ、ソロモン、ソクラチス、孔子、釋迦、マホメット――其名は千歳に輝けどもそが社會に及ぼす感化は年の隔たるに從ひて漸次減少する人口――の如きに非ず彼は永久

の子にして吾人をして活ける神に結合せしむる者なり彼は今日も猶ほ吾人とともに棲息し搖籃にも育兒院にも學校にも工場にも婚禮にも宴會にも哀悼の家にも墓場にも吾人とともに生存す、彼は葡萄の樹にして吾等は接樹せられたる其枝なり彼は屋隅の主石にして吾等が依て立つ所の基本なり、聖オーガスチンは謂へらく「使徒等は頭を見て其身体の如何を豫想したり、吾等は身体を見て其頭の如何を信ず」と實にイエスは今日も猶ほ生きて其身体たる教會の中に活動す、而して此事實たるや基督教をして他宗教と異ならしむる所以のものにして基督教國が非基督教國の普通性たる腐敗停滯に超然として活動進歩の勢力を有するは一に其原因を彼にとればなり、神の道肉体となれり而して彼は吾等と同じ人性を有したりてふ信仰は之れ基督教信仰の主石たるのみならず亦文明――政治、宗教の自由、科學研究の自由、道德上社會上の勢力を有する文明――の基本たらずんばあらず、彼によりてイスラエルの宗教は人類の宗教となり、萬代不磨の宗教として永續す、基督教の內容は人類の進化につれて彌々豐富となり、イエスが洞見したる人類の美性は着々實現せられつゝあり、實に文明は基督教に外ならず而して諸基督

教國民の生命の根底は基督に存す、かの非基督教國民は失敗せざらんが爲めに基督教文明の方法に倣ひ基督教文明の器具を採用す實に人類はイエスに依りて天父に對して正當なる關係に入るを得たり「我に由らざれば父の所に往くこと能はず」てふ語は靈的法則を言出したるものにしてそが確乎不動たるは物質界に於ける重力の法則の不變不動なるに異ならず吾人は彼に由りて神々の位地――吾人の祖先が神に背き外界の樂によりて得んと企てたる神々の位地――に上進するを得るなり、

オリケン曰く「基督教は世界の宗教の一たるよりも以上のものなりこは之れ正義の道の宣言なり」と去れば正義のある所にはイエスは自ら尊崇せられざるを得ず「彼の頭上には多くの王冠ありて存す」何となれば凡ての宗教の開祖は其崇拜を彼に捧ぐればなり

彼の生涯が世界に與へたる祝福は
過去の善事と抵觸矛盾せず
彼のいたく驚嘆すべき死が

一秩序の古今に貫通せるを證するは
甚だ感謝すべき事にぞある

（ホイッチャー）

世界の諸宗教

明治四十二年八月十四日印刷
明治四十二年八月十七日發行

鹿兒島縣鹿兒島市呉服町四番地
譯者　白石喜之助

東京市京橋區銀座四丁目一番地
發行者　堀田達治

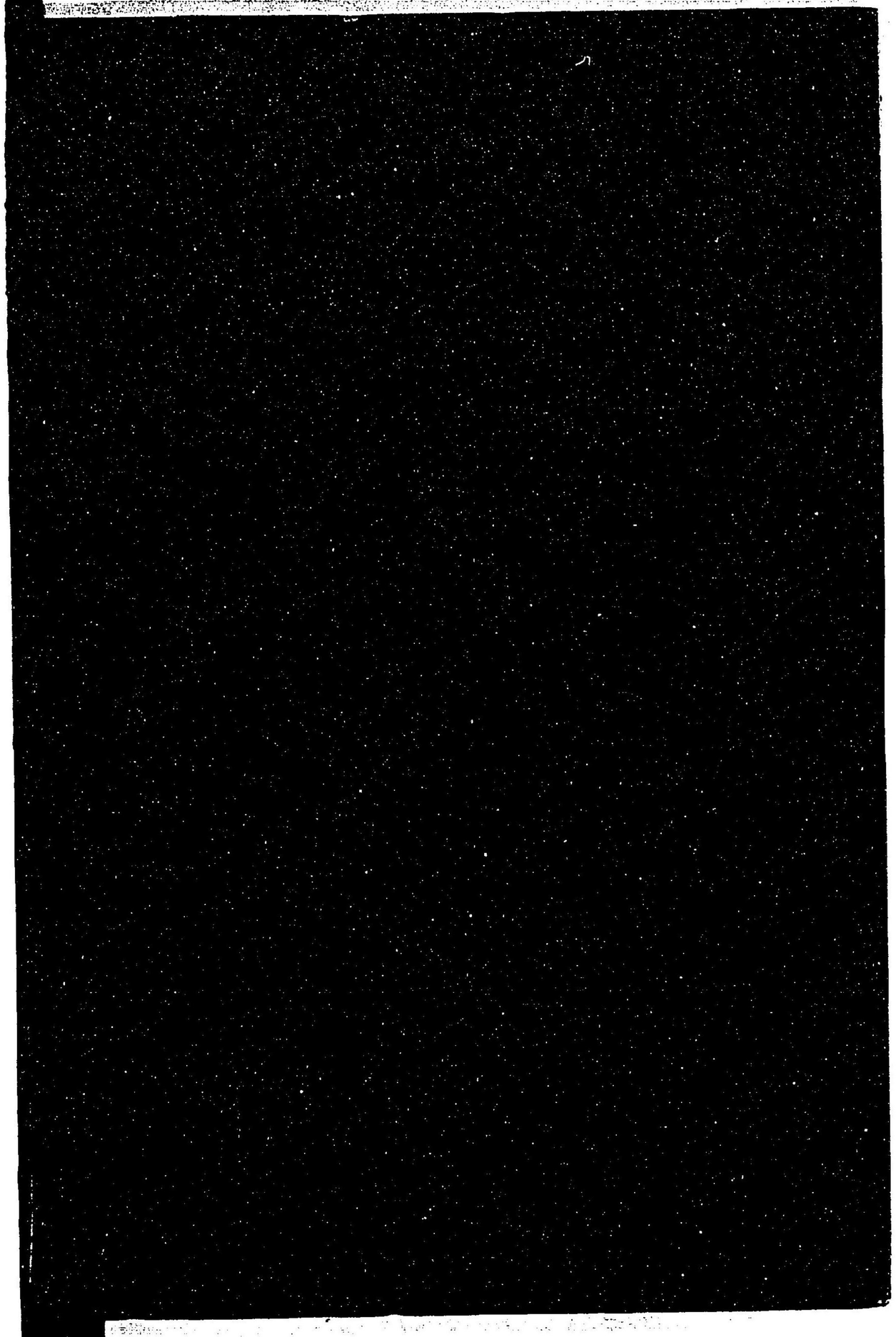
東京市京橋區銀座四丁目一番地
印刷人　デー、エス、スペンサー

東京市京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　敎文館印刷所

東京市京橋區銀座四丁目一番地
發行所　敎文館

不許複製

324
153



013701-000-5

324-153

世界の諸宗教（宗教の比較研究）

グラント／著

M42

ABA-0172

32 1 23